

紀要 第42号

(論文)

東北地方・縄文晩期の土偶（8）

1～16

金子 昭彦

宮古市田鎮車堂前遺跡における居館の構造と機能

17～36

福島 正和

(研究ノート)

岩手県における磨製石斧の製作工程について

37～44

村木 敬

紫波町比爪館遺跡出土の鉄製馬具

45～54

村田 淳

令和5年3月

(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

序

(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもと、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、出土資料の整理と記録保存を目的として調査報告書を刊行してまいりました。

また、これら資料の活用を図るため普及啓発事業や考古学関連分野の調査研究にも努めております。昭和56年以降、研鑽の成果を広く公開するために紀要を刊行してまいりましたが、このたび第42号を発刊する運びとなりました。

本紀要には、論文等4編を収録いたしました。これらは、職員が発掘調査や室内整理、報告書作成などの業務の合間に、個々の研究成果をまとめたものであります。本書が学術研究の基礎資料として、また地域史や社会教育の資料として広く活用されることを願って止みません。

最後になりましたが、紀要の作成にあたり、ご協力をいただきました関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

令和5年3月

公益財団法人 岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター
所長 齊藤邦雄

例　　言

- 1 この紀要是、埋蔵文化財の調査及び研究事業の一環として、考古学及び考古学関連分野の研究を推奨し、考古学をはじめとする学術振興に寄与するとともに、埋蔵文化財保護思想の普及を図ることを目的として作成したものである。
- 2 本紀要には、論文2編、研究ノート2編を収録している。
- 3 引用図面は、各執筆者がそれぞれ許可を得て掲載している。
- 4 本年度の編集委員の構成は、次のとおりである。

編集委員　主任文化財専門員	北村　忠昭
編集委員　文化財専門員	村田　淳

東北地方・縄文晩期の土偶（8）

-本稿（6）以降の（7）で取り上げた多出遺跡を除く新報告資料、（6）以前の遺漏資料-

金子 昭彦

東北地方・縄文時代晩期土偶のデータ・ベース化の一環として今回は本稿(6)（金子2016）脱稿後に報告された新資料と(6)脱稿前に報告された資料の遺漏分を扱うが、(7)（金子2022）で既に扱った二十点以上新報告遺跡を除く。長く報告が待望されていた青森県模の木遺跡と宮城県山王廻遺跡の資料、青森県清水森西遺跡と岩手県川岸場Ⅱ遺跡の弥生時代中期資料が注目される。

1.はじめに

本稿(6)執筆後に報告された資料（対象としては2015年4月以降発刊のもの）を“新報告資料”とし（第14表）、それ以前に報告されていた“遺漏資料”と分けて扱う（第15表）。新報告資料のうち、管見にした二十点以上出土した遺跡については、前稿(7)で既に扱っている（金子2022）。

2.表の見方

記載要綱は、(1)～(7)と同じである。大綱は(1)冒頭に記し、(2)～(7)冒頭で補足しているので参照願いたい。形態分類についても同様である。網掛は、報告書に記載がなく不明な項目である。

部位は、完全に残っていれば○、欠けているが半分まで残っていれば△、それ以下ならば△で示した。接合欄の記号。△は、詳細は不明だが、接合していると思われるもの。○は、すぐそばの破片が接合したのではなく、廃棄後に割れたとは考えられないもの。“同”は接合しない同一個体破片あり。付着物の欄。表面に塗布する赤色付着物は、痕跡的なもの（不明含む）を○、全面塗布のものを●とした。黒色付着物は、塗布箇所が割口か否かに注意した。“女性”とは“女性的特徴の有無”的である。ここでは、遮光器土偶など、類例が多くよく知られている類型については、女性器の有無だけ記し（有る場合、▼と記す）、その他の類型については、上記の特徴が認められる場合、全て記したいと思うが、縄文土偶は乳房を持つのが普通なので、特に大きいものだけ記す。乳、線（正中線の意）等と略記し、複数認められる場合は○、三つ以上の場合は●と記し、備考欄に内容を略記する。なお、腰部に見られるパンツ状区画は、裸体表現（屈折像土偶など）や大きな乳房を持つ土偶（前葉の大型遮光器土偶など）に伴う場合がほとんどで、何らかの“女性的特徴”を表現している可能性が高いので、検討の対象に含めた（ある場合 “△”と記す）。

掲載箇所欄で文献名を引用する際、発行機関・発行年（西暦）で示すが、発行年は下二桁のみ、発行機関は、次のように略称している。○○県の教育委員会→県教、○○県の埋蔵文化財センター→県埋、○○市町村の教育委員会→○○（市町村名）、発行機関名が長い場合は最初の二文字で示したが、通称に倣って、弘前大学は“弘大”、国立歴史民俗博物館は“歴博”、陸前高田市は“陸高”と略す。備考欄で類例を引用した際の数字は、本稿(1)～(7)の表番号（通しで付けている）である。

第14表 新報告資料（1）（＊註の内容は、本文註の後に）

名	属	種名	科	属	種	原生地	現生地	現地名	付番	つくり	女性	出土位置	通	高麗系	備	備考			
																物	（制作年）	世	代
N252	北	大平	絶壁	山	巖	○	○	○	1/4	6.0	○	●御前瓦	海	海城	道達17～p.8403	摩利。姑洗酒器なし。唐突列第2。且.4			
N253	北	大平	不平	山	巖	?	○	○	?	不明	4.9	○	圓?管瓦	海	海城	道達17～p.8404	上部の空。多量燒。土偶。		
N253	北	大平	不平	山	巖	?	△	△	1/2	2.2	?	先兆作	砂	砂丘	ツガ19～p.5203	定慶丸瓦方尺。吉田利4			
N254	北	大平	絶壁	山	巖	A?	○	○	1/5	5	?	?	砂丘	ツガ19～p.5203	嘉慶中央瓦方尺。吉田利5つし分				
N255	北	大平	断崖	山	巖	BC2等	○	○	○	1/4	7.5	?	?	砂丘	ツガ19～p.5204	正中定慶。パンノリ瓦方尺。吉田利6			
N256	北	大平	絶壁成風	山	巖	○	○	○	2/5	7.6	?	?	砂丘	ツガ19～p.5205	上部の空。多量燒。土偶。				
N257	北	大平	絶壁	山	巖	?	△	△	小坪	4	?	?	砂丘	ツガ19～p.5206	新津けむり瓦方尺。吉田利6				
N258	北	大平	絶壁	山	巖	?	△	△	小坪	3.7	?	?	砂丘	ツガ19～p.5207	嘉慶中央瓦方尺。吉田利7				
N259	北	大平	絶壁	山	巖	?	○	○	?	不明	8.2	?	砂丘	ツガ19～p.5208	慶應元年。吉田利8				
N260	北	大平	絶壁断面	山	巖	?	?	?	?	不明	4.2	?	?	砂丘	ツガ19～p.5209	嘉慶中央瓦方尺。吉田利9			
N261	北	大平	断崖	山	巖	五所	△	△	1/5	4.6	?	?	砂丘	ツガ19～p.5210	嘉慶元年。吉田利10				
N262	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	小坪	1.7	?	?	砂丘	ツガ19～p.5211	嘉慶元年。吉田利11				
N263	北	大平	断崖	山	巖	五所	△	○	1/6	4.3	?	?	砂丘	ツガ19～p.5212	嘉慶元年。吉田利12				
N264	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	1/9	3.7	?	?	丘陵	半山1～p.204-3	岐阜?。喜連利1。利村				
N265	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-4	岐阜?。喜連利2。利村				
N266	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-5	岐阜?。喜連利3。利村				
N267	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-6	岐阜?。喜連利4。利村				
N268	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-7	岐阜?。喜連利5。利村				
N269	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-8	岐阜?。喜連利6。利村				
N270	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-9	岐阜?。喜連利7。利村				
N271	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-10	岐阜?。喜連利8。利村				
N272	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-11	岐阜?。喜連利9。利村				
N273	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-12	岐阜?。喜連利10。利村				
N274	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-13	岐阜?。喜連利11。利村				
N275	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-14	岐阜?。喜連利12。利村				
N276	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-15	岐阜?。喜連利13。利村				
N277	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-16	岐阜?。喜連利14。利村				
N278	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-17	岐阜?。喜連利15。利村				
N279	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-18	岐阜?。喜連利16。利村				
N280	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-19	岐阜?。喜連利17。利村				
N281	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-20	岐阜?。喜連利18。利村				
N282	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-21	岐阜?。喜連利19。利村				
N283	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-22	岐阜?。喜連利20。利村				
N284	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-23	岐阜?。喜連利21。利村				
N285	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-24	岐阜?。喜連利22。利村				
N286	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-25	岐阜?。喜連利23。利村				
N287	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-26	岐阜?。喜連利24。利村				
N288	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-27	岐阜?。喜連利25。利村				
N289	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-28	岐阜?。喜連利26。利村				
N290	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-29	岐阜?。喜連利27。利村				
N291	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-30	岐阜?。喜連利28。利村				
N292	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-31	岐阜?。喜連利29。利村				
N293	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-32	岐阜?。喜連利30。利村				
N294	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-33	岐阜?。喜連利31。利村				
N295	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-34	岐阜?。喜連利32。利村				
N296	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-35	岐阜?。喜連利33。利村				
N297	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-36	岐阜?。喜連利34。利村				
N298	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-37	岐阜?。喜連利35。利村				
N299	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-38	岐阜?。喜連利36。利村				
N300	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-39	岐阜?。喜連利37。利村				
N301	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-40	岐阜?。喜連利38。利村				
N302	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-41	岐阜?。喜連利39。利村				
N303	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-42	岐阜?。喜連利40。利村				
N304	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-43	岐阜?。喜連利41。利村				
N305	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-44	岐阜?。喜連利42。利村				
N306	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-45	岐阜?。喜連利43。利村				
N307	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-46	岐阜?。喜連利44。利村				
N308	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-47	岐阜?。喜連利45。利村				
N309	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-48	岐阜?。喜連利46。利村				
N310	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-49	岐阜?。喜連利47。利村				
N311	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-50	岐阜?。喜連利48。利村				
N312	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-51	岐阜?。喜連利49。利村				
N313	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-52	岐阜?。喜連利50。利村				
N314	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-53	岐阜?。喜連利51。利村				
N315	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-54	岐阜?。喜連利52。利村				
N316	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-55	岐阜?。喜連利53。利村				
N317	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-56	岐阜?。喜連利54。利村				
N318	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-57	岐阜?。喜連利55。利村				
N319	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-58	岐阜?。喜連利56。利村				
N320	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-59	岐阜?。喜連利57。利村				
N321	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-60	岐阜?。喜連利58。利村				
N322	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-61	岐阜?。喜連利59。利村				
N323	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-62	岐阜?。喜連利60。利村				
N324	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-63	岐阜?。喜連利61。利村				
N325	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-64	岐阜?。喜連利62。利村				
N326	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-65	岐阜?。喜連利63。利村				
N327	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-66	岐阜?。喜連利64。利村				
N328	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-67	岐阜?。喜連利65。利村				
N329	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-68	岐阜?。喜連利66。利村				
N330	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-69	岐阜?。喜連利67。利村				
N331	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-70	岐阜?。喜連利68。利村				
N332	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-71	岐阜?。喜連利69。利村				
N333	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-72	岐阜?。喜連利70。利村				
N334	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-73	岐阜?。喜連利71。利村				
N335	北	大平	断崖	山	巖	五所	○	○	?	不明	4	?	丘陵	半山1～p.204-					

No.	場	遺跡名	形態	特徴	個 位		周長	縦合	付着物	つくり	性 生 物 性 別	土 地 立 地 評 価	高 低 量 所	備 考			
					胸	腹											
5252	島	島中	頭部B?	C古?	○	△	不明	5		斜面	缺7	山田20~280	根深時、目立つ。骨質状突起部。柱狀				
5253	島	島中	大遺系統	A1	△	△	○	1/8	3.2	斜面	缺7	山田20~296	斜面更複雑。算字文字系三文字				
5254	島	不動I	大遺	C1新?	○	△	○	1/6	7.6	△	色斑	施点	花春18~177	付着物各不詳。頭少。第2段。斜面			
5255	島	不動I	大遺	BC2	△	△			小片	3.8	色斑	施点	花春18~178	△。直側面。頭部C文字			
5256	島	不動I	大遺?	前頭?	△				小片	3.2	中空口直通	色斑	施点	花春18~179	△。『繩竹刀』。鼻部齊(直孔)。		
5257	島	不動I	大遺	BC1?	△				小片	1.8	色斑	施点	花春18~180	△。肩部。頭部C文字			
5258	島	不動I	大遺?	後頭?	△		不明	8	中空	色斑	施点	花春18~181	△。長い削りを保つ。鼻部齊(直孔)				
5259	島	豊原形	斜面?	後斜面	△	○	1/7	8.3	中空	磨?	半?	新石器期~9700	磨?斜面。平行斜面無文部				
5260	島	豊原形	斜面?	後斜面	△				小片	4	中空?	磨?	半?	新石器期~9700			
5261	島	豊原形	斜面?	後斜面	△		○		小片	5.3	中空?	磨?	半?	新石器期~9700			
5262	島	豊原形	斜面?	後斜面	△				△	3.2	足上中空	磨?	半?	新石器期~9700			
5263	島	豊原形	斜面?	後斜面	△	△	○	1/8	5.2			磨?	半?	1/540~28			
5264	島	豊原形	斜面?	後斜面	△				△	5.7	足上中空	磨?	半?	1/2040~59			
5265	島	豊原形	斜面?	後斜面	△	○			△	4	足上中空	磨?	半?	1/2040~60			
5266	島	豊原形	斜面?	後斜面	△				△	4	中空?	磨?	半?	1/2040~61			
5267	島	豊原形	斜面?	後斜面	△				△	5.4	中空?	磨?	半?	1/2040~62			
5268	島	豊原形	斜面?	後斜面	△				△	3	中空?	磨?	半?	1/2040~63			
5269	島	豊原形	斜面?	後斜面	△				△	5.4	中空?	磨?	半?	1/2550~11			
5270	島	豊原形	斜面?	後斜面	△				△	5.2	中空?	磨?	半?	1/2550~13			
5271	島	豊原形	斜面?	△	A	~△			△	3.7	中空?	斜面	施点	1/101			
5272	島	豊原形	斜面?	△	BC2?	○		1/5	4.6			斜面	施点	1/100~101			
5273	島	豊原形	斜面?	△	~C1	△		1/5	3	中空					斜面被破。丸。尖端部に斜面		
5274	島	豊原形	斜面?	△	~C1	△		△	3.5	中空					大土塊。無文		
5275	島	豊原形	斜面?	△	BC2?	○	○	2/5	7.8						丸。圓。頭状突起。斜面		
5276	島	豊原形	斜面?	△	A1~	△		△	2.3	中空					斜面不規。斜面		
5277	島	豊原形	斜面?	△	C1?	△	○	1/5	3.8						斜面不規。丸。斜面		
5278	島	豊原形	斜面?	△	~C1	△		△	3	中空					斜面。丸。斜面		
5279	島	豊原形	斜面?	△	C2中?	△		△	2.6	中空?					目口横に斜點。目口上縁文		
5280	島	大圓頭形	斜面?	A2~?	△	△	○	1/6	5.2			丘陵	施点	1/264			
5281	島	奈良首?	斜面?	後頭?	△		○	不明	4	斜口	丘陵	施点	1/264	斜面。斜面被破。斜面。頭部			
5282	島	奈良首?	斜面?	A1	○	○	○	1/5	7		丘陵	施点	1/264~1432	斜面。大船形。耳。斜面			
5283	島	奈良首?	斜面?	BC2?	○	?	?	小片	4	斜口	丘陵	施点	1/264~1433	斜面。丸。斜面			
5284	島	奈良首?	斜面?	△	~C1	△		△	2.9	中空?	丘陵	施点	1/264~1434	斜面。丸。斜面			
5285	島	奈良首?	斜面?	△	C2中?	△		△	1.2	中空?	丘陵	施点	1/264~1435	斜面。丸。斜面			
5286	島	奈良首?	斜面?	A1	○	○	○	1/10	4.2	中空?	丘陵	施点	1/264~1436	斜面。丸。斜面			
5287	島	奈良首?	斜面?	~A2?	△		○	不明	6.1		丘陵	施点	1/264~1437	斜面。丸。斜面			
5288	島	奈良首?	斜面?	A1前?	○	○	○	1/4	6.9	中空?	丘陵	施点	1/264~1438	斜面。丸。斜面			
5289	島	豊原形	斜面?	A?	△			△	2.7	足上中空	丘陵	施点	1/264~1439	斜面。丸。斜面			
5290	村	下台	斜面?	A1新?	△	○	○	2/5	4.2	○	丘陵	施点	1/264~1440	斜面。丸。斜面			
5291	村	下台	斜面?	~?	△			△	2.4	○	丘陵	施点	1/264~1441	斜面。丸。斜面			
5292	村	下台	斜面?	~?	○			○	1.7	○	丘陵	施点	1/264~1442	斜面。丸。斜面			
5293	村	下台	斜面?	A1前?	△	○	○	1/8	4.2	○	丘陵	施点	1/264~1443	斜面。丸。斜面			
5294	村	下台	斜面?	A2?	△			△	3.3	中空?	丘陵	施点	1/264~1444	斜面。丸。斜面			
5295	村	下台	斜面?	A1?	△			△	2.5	○	丘陵	施点	1/264~1445	斜面。丸。斜面			
5296	村	中山	頭部以降	?	△		△	不明	5.1		丘陵	施点	1/264~1446	正中直面。頭部。丸。斜面			
5297	村	中山	頭部以降	?	?	○	○	不明	6.5	斜口	丘陵	施点	1/264~1447	斜面。丸。斜面			
5298	村	中山	△	BC2?	○		○	1/2	9.8		丘陵	施点	1/264~1448	正中大斜面。頭部向右彎曲。薄面直通			
5299	村	中山	△	~C1	○	○	○	5/9	9		丘陵	施点	1/264~1449	「舟底」。足部。洋鰐頭溝頭文(C)文字			
5300	村	大汎I	頭部以降	?	?	○	○	不明	3.8	斜口	丘陵	施点	1/264~1450	足部沈文部。頭部直面(丸)。斜面			
5301	村	大汎I	頭部以降	?	?	△	○	△	1/5	6	斜口	丘陵	施点	1/264~1451	足部直面。頭部斜面。斜面		
5302	村	大汎I	頭部以降	B1吉?	○			△	1/6	5.2	斜口	丘陵	施点	1/264~1452	足部直面。頭部斜面。斜面		
5303	村	大汎I	頭部以降	BC2?	△	△		△	3.2	中空?	丘陵	施点	1/264~1453	頭部直面。頭部斜面。C文字。頭部縫			
5304	村	綱田	頭部变形	A~	○	○	○	~	9/10	9.2	△	板狀	施点	1/264~1454	頭部直面。頭部斜面。頭部縫		
5305	村	大久保~	△	△	C2前?	○		1/10	4.9		丘陵	施点	1/264~1455	正中Y斜面。頭部中央側面通縫			
5306	村	大久保~	△	△	C2前?	○		○	2.1	△	板狀	施点	1/264~1456	頭部沈文部。頭部直面。斜面			
5307	村	山王座	斜面?	青木?	○			?	?		丘陵	施点	1/264~1457	足部直面。頭部斜面。頭部縫			
5308	村	山王座	△	△	A1	△	○	○	4	斜口	丘陵	施点	1/264~1458	頭部直面。斜面。頭部縫			
5309	村	山王座	△	△	~A1	△	△	△	1/5	8.6	圓	丘陵	施点	1/264~1459	頭部直面。平行斜面。頭部彌文直通		
5310	村	山王座	△	△	C2前?	△		△	1.4	斜口	丘陵	施点	1/264~1460	頭部直面。斜面。頭部縫			
5311	村	山王座	△	△	A1?	△		△	1.3	中空?	丘陵	施点	1/264~1461	頭部直面。頭部縫。B字記。日記			
5312	村	山王座	△	△	C2後?	△		△	3	中空?	丘陵	施点	1/264~1462	頭部直面。斜面。頭部縫			
5313	村	山王座	△	△	~A1	△	△	1/5	5.3	中空?	丘陵	施点	1/264~1463	頭部直面。斜面。頭部縫			
5314	村	山王座	△	△	青木?	○		△	3	頭流かし	丘陵	施点	1/264~1464	頭部直面。斜面。頭部縫			
5315	村	山王座	△	△	後斜面	○	○	△	不明	3	頭流かし	丘陵	施点	1/264~1465	頭部直面。斜面。頭部縫		
5316	村	山王座	△	△	A?	○		△	1/6	6.2	?	大型中空	施点	1/264~1466	●●●頭部直面。斜面		
5317	村	山王座	△	△	斜面?	○	○	○	不明	8	?	?	施点	1/264~1467	頭部直面。斜面		
5318	村	山王座	△	△	~A?	△		△	3.2	頭流かし	?	?	施点	1/264~1468	頭部直面。斜面		
5319	村	山王座	△	△	A1?	○	○	○	1/6	4	頭流かし	?	?	施点	1/264~1469	頭部直面。斜面	
5320	村	山王座	△	△	A1?	○	○	○	2.6	頭流かし	?	?	施点	1/264~1470	頭部直面。斜面		
5321	村	山王座	△	△	後?	○		△	3.5	頭流かし	?	?	施点	1/264~1471	頭部直面。斜面		
5322	村	山王座	△	△	~C1	○		△	3	中空?	?	?	施点	1/264~1472	頭部直面。斜面		
5323	村	山王座	△	△	A1?	○		△	2.6	中空?	?	?	施点	1/264~1473	頭部直面。斜面		
5324	村	山王座	△	△	~A?	○	○	○	1/5	8.4	中空?	?	?	施点	1/264~1474	頭部直面。斜面	
5325	村	山王座	△	△	~A1?	○		○	不明	5.4	中空?	?	?	施点	1/264~1475	頭部直面。斜面	
5326	村	山王座	△	△	A1?	○		○	○	4.4	頭流かし	?	?	施点	1/264~1476	頭部直面。斜面	
5327	村	山王座	△	△	C2後?	○		○	4.3	頭流かし	?	?	施点	1/264~1477	頭部直面。斜面		
5328	村	山王座	△	△	後?	○		△	4.5	頭流かし	?	?	施点	1/264~1478	頭部直面。斜面		
5329	村	山王座	△	△	~A?	?	△	不明	2.8	板狀	?	?	施点	1/264~1479	頭部直面。斜面		
5330	村	山王座	△	△	後?	○		○	不明	4	板狀	?	?	施点	1/264~1480	頭部直面。斜面	
5331	村	山王座	△	△	斜面?	~A?	△	?	?	4.2	板狀?	?	?	施点	1/264~1481	頭部直面。斜面	
5332	村	山王座	△	△	A?	○		○	1/9	5	○	板狀	?	?	施点	1/264~1482	頭部直面。斜面

No.	県	遺跡名	形態	特徴	位		南北面	東西面	高さ	付着物	つくり	出土	説明	評価	遺跡名	備考		
					強	弱												
5332	宮	いもり・結型?	~A 新	△			不明	2.4			★桂園石	丘埋	地?	大崎21~9582	結型碑片? 二叉立陶平行双頭			
5334	宮	いもり・土造系?	A 1?	△ ○			○	1.8	3.6			丘埋	地?	大崎21~9583	正中剥離? 土造平頂。手前日4			
5335	宮	いもり・絆型変形	A 新	○ ○			○	不明	4.8		→	丘埋	地?	大崎21~9584	T字狀? ★体内深孔。脚様平行移多			
5336	宮	いもり・絆型	~A 新	△			○	小片	3.1			丘埋	地?	大崎21~9585	青竹茎。脚様二字形。手先剥目4			
5337	宮	いもり・絆型変形	~A 新	△ ○			○	不明	8			丘埋	地?	大崎21~9586	O形。脚平均移2脚突多			
5338	宮	いもり・絆型斜刻	~A 新	△			△	不明	2.1			丘埋	地?	大崎21~9587	足裏椎円形			
5339	宮	いもり・~大型	~A 新	△			△	不明	2.4			足上中空	丘埋	地?	大崎21~9588	足裏椎円形		
5340	宮	いもり・絆型	~A 新	△			△	小片	2.2				丘埋	地?	大崎21~9589	青中平行變?		
5341	宮	北小山	絆型変形	~A 1?	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○		○	9.0	8.2			脱開斜空	地					
5342	宮	通字...	脚型文	末~	△		○	小片	4.1	○		中空	冲撃	地?	大崎21~9590	青之ツ。溝文。刻文判別		
5343	宮	通字...	絆型	~A 1?	△		○	小片	2.6	○		輪縫中空	冲撃	地?	大崎21~9591	朱色? 乳突孔點化? 沈頭。刻文判別		
5344	宮	ト梅子字	脚型文?	~A 1?	○ ○ ○ ○ ○ ○		○	不明	6.6			丘?	数?	大崎21~9592	折れ? 脚斜多。腰錐形。裏6文字			
5345	宮	川前	?	中空?	△		△	不明	3.3			透窓?	仙台19~3137	小型無文? 端直背				
5346	宮	川前	絆型削?	C 2?	○ ○ ○ ○ ○ ○		○	不明	7			透窓?	仙台19~3205	青文。脚凹口の形。背中円文。腰錐形				
5347	宮	川前	絆型A?	~B2?	○ ○		○	1/9?	8			透窓?	仙台19~3481	脚凹口。腰錐円形。足割アリ				
5348	山	上竹野	脚型文	A 新?	△ ○ ○		○	5.9	9	○		輪縫中空	地	地埋	地? 平頂	鹿澤19~124-11	正中隆起上沈頭。表面突。背右下文	
5349	山	上竹野	脚型文	~A 1?	△ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○		△	小片	1.7	○	背面	中空?	地埋	平頂	154-10	足裏丸みを帯びた脚円形		
5350	山	上竹野	脚型文	~A 1?	△ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○		△	小片	1.3				地埋	平頂	154-11	足裏丸みを帯びた台形。先兆目5		
5351	山	上竹野	脚型文	青木?	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○		○	4.5	15.3	○	中空	地	地埋	平頂	160-1	正中沈頭。腰錐形。★皆下貫通丸		
5352	福	毛里御殿	脚型文?	?	△		○	小片	5.6			丘?	数?	鹿澤20~90-3	青生中間横半径尾端上出土。裏4文字			
5353	福	毛里御殿	脚型?	~B2?	△ ○		○	不明	6			地埋	地?	鹿澤19~268-11	表裏縞文地赤墨波状三文			
5354	福	毛里御殿	脚型?	A 1?	○ ○		○	不明	5.8	回		地埋	地?	鹿澤19~269-7.8	長い漏バッジ。肩上に広い堆円基座			

3. その後（本稿(6)以降、(7)で取り上げた多出遺跡を除く）の報告資料

(1) 北海道

北海道出土品は本稿の直接の対象でないため参考資料として別番号をふっている（h）。

・木古内町大平遺跡（第14表h252~h253）（（公財）北海道埋蔵文化財センター2017）

札苅遺跡の南西約1.5kmにある。自動車道建設に伴い1,700m調査され、縄文時代晚期前葉の墓と焼土、晚期後葉の捨て場などが検出された。まとまった点数の土器として、縄文時代後期後葉～末、晚期前葉～後葉が出土しているが、「土器の7割強は縄文時代晚期後葉」（報告書：p.8）らしい。

当該期の土偶は2点らしいが、第14表h253を晚期後葉の土偶の脚部と判断した根拠が不明である。後期後葉の比較的の残りの良い土偶2点、墓から漆塗櫛2点、サメ歯16点出土している。北斗市添山遺跡で既に結髪系土偶の存在は知られていたが（金子2020b）、より明瞭な例が出土した。

(2) 青森県

・つがる市亀ヶ岡遺跡（第14表5173~5175）（つがる市教育委員会2019）

各種開発行為に備え、また将来の史跡追加指定も目指し、丘陵上を中心に1,535m確認調査された。丘陵上で再び土坑墓群は検出されたが、豊穴住居跡は晚期前半の数棟に留まる。土偶が出土した地点（157m）では、大洞A1式～砂沢式土器などが出土した。「総括報告書」として、これまでの調査結果もまとめられている。亀ヶ岡考古資料室に寄託された土偶4点が図化されているが、残念ながら観察記述がない。既に取り上げた資料（本稿(2)第2表1170、1174）を除く2点を表にした。

・鰐ヶ沢町新沢1遺跡（第14表5176~5180）（青森県教育委員会2016）

国道バイパス？建設事業に伴い3,500m調査され、平安時代の集落跡（住居7）が主に発見された。その他、縄文時代晚期？の土坑12基、弥生時代前期の土器埋設遺構1基などが検出され、砂沢式土器が比較的まとまって出土しており、その他、大洞B C 1式の残りの良い土器などが見られる。

・弘前市清水森西遺跡（第14表5181~5185）（弘前大学2019）

学術調査で約160m調査し、弥生時代中期前葉の集落跡が発見された。出土土器は、五所式のみのようである。調査出土品のはか表採資料の3点の報告もある（第14表5183~5185）。同じく5点の表採土偶が既に報告されていて（工藤1978）次節で補った。第14表5181は、土坑から出土し、報告書では特に墓とされていないが、平面形と規模、土器の出土状況から、可能性は高い。ただし、土偶は、その上層から破片で出土し、墓に伴う可能性は低いと考え、表では埋土ではなく覆土とした。

・青森県平内町機の木遺跡（第14表5186~5207）（国立歴史民俗博物館2022）

第15表 遺漏資料(1) (*註の内容は、本文註の後に)

田中忠三郎氏から購入したコレクションの一部報告だが、「土偶や土版については形状が判明するものはほぼ全てを収録している」(報告書:p.7)。観察表はほぼ法量のみで、付着物の有無等観察事項に不明瞭な点があるが、報告書の鮮明なカラー写真を頼りにした。掲載土器は、大洞B1～C2式がほとんどで、大洞BC2式が最も多いが、大洞A2式、縄文時代後期前、後葉も見られる。土偶は、この傾向に沿うが、岩版・土版では、5類が2点、6類が1点あり(稲野1983)、新しい方もまとまつた数が見られる。次節概の木遺跡資料参照。報告書図39の12は、施文や整形が丁寧なのに人らしさを感じさせず土偶ではないと判断して割愛した。第14表5187について、報告者は「胸部で交わる箇所に一対の粘土粒が貼り付けられるのは」5186「の大型品と同様である」という鋭い観察を示しているのに、5189と5190を同一個体と見なしている。大きさのバランスが合わないし、時期も違う可能性が高い。5196は、小型遮光器土偶とx字形土偶の折衷で、津軽地方には比較的よく見られ(前稿(7))、本例の胸部文様はx字形土偶のそれだが、プロポーションや顔が比較的写実的で鼻の作出も見られる。

・階上町道仏鹿群遺跡(第14表5208～5210)(青森県教育委員会2017)

本稿(5)(金子2015a)で扱った平成21年度調査区の隣接地である。三陸自動車道建設に伴い27,000m²調査され、縄文時代の落とし穴が主に発見された。縄文時代晚期後葉～末の土器が比較的まとまって出土している。第14表5210は、全く同様のものが2点前回の調査でも出土している(本稿(5)第7表3621、3622)。報告書では「小型遮光器土偶の脚部と考えられる」とするが(p.65)、前回の調査も含め晚期前半の土器は全く出土していないようである。円柱状の点が気にかかるが、土器の脚か。

(3) 岩手県

・洋野町宿戸遺跡(第14表5211～5213)((公財)岩手県文化振興事業団2021)

海成段丘の中位傾斜地に立地するが見た目では丘陵状を呈す。三陸自動車道建設に伴って調査され、調査区は、谷を挟んで標高の低い北区(8,000m²)と標高の高い南区(9,400m²)に分かれ、北区では、縄文時代後期前葉?、後期中葉、後期後葉、晚期後葉、弥生時代後期の堅穴住居が断続的に見られ、南区では、縄文時代早期中葉～前期前葉の拠点的集落跡と中期後半の集落跡が主に検出されている。掲載土器は、本稿の対象である縄文時代後期末～弥生時代は僅かであり、大洞A1式が比較的まとまっている程度で、土偶と同時期と考えられる土器は見られないようである。表には三点の土偶を掲載したが、二点は土偶でない可能性も高く、出土したのも南区である。大洞A2式期の結髪土偶(本稿(1)=第1表1079、1080)を出土した戸類家(いくつなみ)遺跡は、本遺跡の北西約2kmと近い。

・八幡平市松尾釜石環状列石遺跡(第14表5214～5233)(八幡平市教育委員会2017)

遺跡名は報告書に依拠し、表の掲載箇所欄の「図V-1」は省略した。昭和28(1953)年に行われた学術調査の報告である(約400m²)。縄文時代晚期の集落跡(配石遺構主)が検出され、概ね縮付土器第Ⅲ段階～大洞A1式土器が主で、大洞B2～BC2式をピークとし、後期末や大洞C2～A1式は僅かである。松尾鉱山資料館保管資料には谷起島式古期もあり、表5228～5233は、「資料館に保管されていた釜石環状列石出土と思われる資料である」(報告書:p.183)。調査出土土偶は遮光器土偶がほとんどで、大洞C2式期以降の大型遮光器系列もある(5227)。より後期に系統性の強い大洞B2式期の大型遮光器系土偶が興味深いが(5214)、実測図は接合前の下半身のみである。資料館保管土偶5点も含め、晚期前半を主とした後期後半～晚期中葉土偶がほとんどだが、資料館土偶の中に晚期後葉例がある。

・宮古市乙部野Ⅱ遺跡(第14表5234～5240)((公財)岩手県文化振興事業団2018)

三陸自動車道建設に伴い4,494m²(幅約30m)調査され、縄文時代前期前葉の集落跡(住居5)、後期初頭～前葉前半の集落跡(住居44、葦窓式期の狩猟文土器)、弥生時代前期末の集落跡(住居

11) が検出された。金子（2021a）では半拠点集落に位置づけたが、今回拠点集落に改めた。

当該期の土器は弥生時代前期末のみ、明確に認識できるのは青木烟式のみである。土偶は17点出土したとされ（報告書：p.173）、掲載された16点のうち当該期の土偶は7点で、1点は結髪土偶、他は刺突文土偶である。報告書第178図1272は、観察表で土器片の可能性が指摘されているとおり土器と判断して割愛した。残存部分の多い破片がほとんどないのが印象的である。

・山田町浜川目沢田I遺跡（第14表5241～5251）（（公財）岩手県文化振興事業団2018）

震災復興に係る土地造成に伴い6,240m²調査され、縄文時代中期後半の集落跡（住居21）が主として発見され、後期中葉の堅穴住居跡1棟、晚期中葉の堅穴住居跡1棟も検出されている。海岸から約200m、標高2～7mという特異な場所に立地する。当該期土器は、後期から続いた大洞C2式古期まで出土し、大洞B C2～C2式古期が多数を占め、大洞B2～B C1式は少なく、それ以前は僅かで、拠点集落とするにはややためらう。当該期の土偶は11点で、後期前～中葉の方が多い。報告書第199図3303は、脚が湾曲していることから後期と判断した（「土偶とその情報」研究会1994：岩手県蔵内、立石遺跡等）。1点を除き遮光器系列である。

・山田町畠中遺跡（第14表5252～5253）（山田町教育委員会2020）

船越半島の大浦低地に向かって西傾する緩斜面に立地し、東日本大震災被災移転に伴う道路整備で1,000m²調査された（幅約6m）。縄文時代後～晚期の集落跡が主として発見され、当該期では瘤付土器第IV段階～大洞A'式新期が見られるが、大洞A'式古期は不明瞭である。大洞C1～2式が多く掲載される。当該期は2点だが、後期前葉の土偶は4点で瘤付土器第I段階の人面付突起も出土した。

・花巻市不動I遺跡平成28年度調査（第14表5254～5258）（花巻市教育委員会2018）

豊沢川右岸の低位段丘北縁に立地する。一帯では、土地区画整理事業に伴う発掘調査が継続して行われ、不動I遺跡東半の北側緩斜面では縄文時代晩期の集落跡が検出されているが、これまでに出土していたのは、小型無文土偶の小片のみであった（本稿(5)第7表3686）。不動II遺跡の不動I遺跡に隣接する部分から大型遮光器土偶が出土している（本稿遺漏資料）。今回の調査は個人経営の賃貸住宅建設に伴うもので、調査面積は約867m²、縄文時代晩期の集落跡（埋設土器9ほか）と東側の不動II遺跡から展開する平安時代集落跡（住居2）、江戸時代以降の屋敷建物跡が検出された。掲載土器は、後期前葉、晚期前～後葉大洞B C2～A2式で、晚期中葉を主体とし、この時期を主体とする土・石製品も出土している（金子2021a：p.26）。土偶は、記載および観察表が僅かで、付着物等詳細は不明である。不掲載だが、観察表には、あと4点の土偶の出土が記されている（報告書：p.37）。

・釜石市屋形遺跡（第14表5259～5270）（釜石市教育委員会2019）

屋形遺跡出土資料については、同じ調査区の県裡蔵文化財センター調査分を本稿(5)（金子2015a）で扱っている。津波避難道路建設に伴い1,714m²調査され、計画変更により貝塚は残され国史跡に指定された。遺跡は、リアス海岸半島部の狭い入り江から斜面上の平坦地に広がり、縄文時代前期前半、前期末～中期前葉、中期後葉～後期前葉、弥生時代前期末、平安時代、中世、近世の集落跡が複合し、中近世の土地造成により削平された部分が多いようである（報告書：p.456）。縄文時代中期末～後期初頭の貝塚が発見され、弥生時代前期末の集落跡は、遺物集中が認められただけである。

当該期では、大洞A'式古期に廻りそうな土器もあるが、大洞A'式新期～青木烟式期が多くを占め、一点だけ大洞A1式土器の台部が掲載されている（報告書：第IV-6-81図31）。土器以外の土・石製品では、土偶12点以外に明瞭なものがない。刺突文土偶に著しく偏り、結髪土偶がほとんど見られないのは、何か意味があるのだろうか（金子2017a：pp.39～40）。

報告書に土器以外の土製品の観察表がなく不明な点がある。第IV-2-20図（p.97）の5は、上部の剥

落の仕方（接合の仕方）が土偶にしては不自然、6は形状が土偶らしくない、7は無機質な印象から、報告者も触れているとおり（p.77）土偶でないと判断して割愛した。第IV-6-67図（p.204）の58の土製品については、報告書にふれられておらず、結髪土偶の頭部の可能性もあるが割愛した。第IV-6-109図（p.255）の12は、板状で、大きめの刺突が列をなしており、土偶以外の土製品と思われ割愛した。第IV-6-119図（p.266）の5は、「中空土偶の一部」（報告書：p.124）とされるが、高壺か浅鉢の口縁部突起と推測して割愛した。

・大船渡市扇洞遺跡（第14表5271）（岩手県教育委員会2016）

三陸自動車道建設に伴い406m調査され、縄文時代晩期末～弥生時代後期前葉の集落跡（住居7棟）が主として検出され、掲載土器のほとんどは、縄文時代晩期末～弥生時代中期中葉である。

・大船渡市宮野貝塚平成24年度調査区（第14表5272～5274）（大船渡市教育委員会2016）

宮野貝塚出土資料については、平成8～11年の個人住宅建設に伴う緊急調査分を本稿(4)（金子2014）で扱っている。平成24年度は、震災後の個人住宅建設に伴い112m²調査され、第17次調査に相当し、南方向に傾斜する遺跡範囲の中で、中央付近の西寄りに位置する。縄文時代晩期前半の埋設土器などが検出され、掲載土器は、当該期では、僅かな瘤付土器第Ⅲ段階から時期を追うごとに徐々に増えていき、大洞C 1～2式でピークを迎えるが、その後は僅かなA式、青木畠式？しか見られない。また晩期中葉土器もそれほど多くはなく破片が主体である。

・大船渡市宮野貝塚平成25年度調査区（第14表5275～5276）（大船渡市教育委員会2015）

平成25年度は、消防関連施設建設に伴い810m²調査され、第19次調査に相当し、南方向に傾斜する遺跡範囲の中で、ほぼ中央付近に位置する。調査区西側は、公民館建設時の削平・変更が多かったようである。古代の集落跡（平安時代堅穴住居1、粘土探掘坑とされる土坑多数）を主体とし、縄文時代の土坑も検出された。縄文時代早期中葉から長期にわたる土器が出土する遺跡だが、今回は出土土器の約半分が縄文時代前期だったそうで（報告書：p.80）、当該期の掲載土器は少ない。大洞A 1式が比較的多く、ついで大洞B C 2、C 1、C 2式である。

・大船渡市宮野貝塚（第14表5277～5279）（（公財）岩手県文化振興事業団2016）

警察駐在所建設に伴い375m²調査され、第20次調査に相当し、南方向に傾斜する遺跡範囲の中で、南方に位置する。土器は、これまでと同様縄文時代前期前葉～晩期末が掲載されているが、当該期では、大洞B 1式新期～大洞A'式古期が見られる。大洞C 1式およびその前後が比較的多い。

・大船渡市大洞貝塚平成27年度調査区（第14表5280）（大船渡市教育委員会2016）

大洞貝塚出土資料については、本稿(1)（金子2010a）、(4)（金子2014）でも扱っている。

個人住宅再建に伴って約743m²調査され、調査範囲は、遺跡範囲の南東隅に位置する。掘立柱建物跡や炉跡が検出され、当該期では大洞A 1式が比較的多いが、全体的にそれほど出土量ではない。

・大船渡市長谷堂貝塚平成26年度調査区（第14表5281～5284）（大船渡市教育委員会2018）

長谷堂貝塚出土資料については、本稿(5)（金子2015a）でも扱っている。個人住宅建設に伴い57m²調査され、遺跡範囲の西側、斜面下方の早稲田大学によりD地点貝塚と呼ばれた場所に位置する。縄文時代後期末～晩期前葉の集落跡（住居2、埋設土器）が主に発見された。副葬品と考えられるクラゲ栓状で環状の土製耳飾（金子2009：第1表＝第1図右端中段の3）が1点埋設土器から出土している。当該期では、瘤付土器第Ⅲ段階～大洞C 2式が掲載され、大洞B C 2式が最も多く、次いで大洞B C 1、B 2式で、それ以外はあまり多くなく、瘤付土器第Ⅲ段階、大洞B 1、C 2式は僅かである。

5281のようなガニ股は、東北南部によく見られる。5283は、四肢の破片だが裁痕列が見られない。報告書では「左腕」とされるが、磨消繩文が浮彫的で大洞B C 2式期の可能性があるが隆帯など見ら

れず肩と考えにくく、腕あるいは脚部分が、大きいのに短めになりつつあり大洞B C 2式期の脚の特徴に合致すること（この時期腕は小さくなり始めている）などから、大洞B C 2式期の腰～脚と判断した。

・大船渡市長谷堂貝塚平成26年度調査区（第14表5285）（大船渡市教育委員会2020）

個人住宅建設に伴い約310m²調査され、遺跡範囲の西端付近、斜面下方に位置する。縄文時代早期後半、平安時代の集落跡が主に発見された。掲載土器は、当該期の土器は少ないが、瘤付土器第III～IV段階、大洞B 2～A 1式、A'新期が見られ、大洞C 2～A 1式が比較的多い。

・大船渡市長谷堂貝塚立会調査区（第14表5286～5288）（大船渡市教育委員会2021）

個人住宅建設に伴い立会調査が行われ、重機での掘削状況を確認している。焼土や土坑、遺物包含層が確認された。縄文時代中期後葉、後期前葉～弥生時代前期末の土器が掲載され、当該期では、瘤付土器第III、IV段階、大洞B 1新～青木畳式が見られ、晚期前葉と大洞C 2式以降が比較的多い。

・陸前高田市鰐沢貝塚（第14表5289）（陸前高田市教育委員会2018）

鰐沢出土資料については、本稿(1)（金子2010a）、(5)（金子2015a）でも扱っている。

個人宅地造成に伴って約235m²調査され、攪乱のみで遺構は検出されていない。出土量は少なく、土器は、縄文時代後期前～中葉、大洞A'式古、新期が掲載されている。

（4）秋田県

北秋田市小勝田館跡出土で「遮光器土偶」とされた資料がある（秋田県教育委員会2015：p.56）。写真が不鮮明ではっきりしない点もあるが、そのように見えず、掲載土器も、この時期のものはないようなので、割愛した。由利本荘市鏡田遺跡出土資料については、本稿(2)で資料化しているが、報告書不掲載の土偶が報告されたので（根岸2021）補った（第14表5304）。写真のみだった資料も実測され（第2表1889）、全ての資料に観察表が付されている。

・八郎潟町下台遺跡（第14表5290～5295）（弘前大学2017）

学術調査で72m²調査し、縄文時代晩期後葉（略大洞A 2式期）の集落跡（住居6棟）が検出された。

・五城目町中山遺跡（第14表5296～5299）、男鹿市大沢I遺跡（第14表5300～5303）（弘前大学2018）

弘前大学人文社会科学部北日本考古学研究センターが、八郎潟沿岸の亀ヶ岡文化研究のため、周辺市町村の調査資料等を再整理したもので、実測図、観察表が掲載されている。

中山遺跡出土土偶については、本稿(2)で扱っており、重複する第2表1668、1911～1915については割愛したが、今回1915の赤色付着物が判明したことを補足しておく。

大沢I遺跡の図50-11、図53-2585の土偶は、後期末以降と判断する材料が全くないので割愛した。なお、図53-2584は、土偶とされているが、報告書裏付上に掲載されている乳房のような人の要素を持つ美々4型中空動物形土製品（金子2017b：p.110）の一例と思われる所以、割愛した。

（5）宮城県

七ヶ浜町二月田貝塚の昭和63（1988）年調査の報告が、東宮貝塚の平成29（2017）年調査の報告と合本で刊行された（七ヶ浜町教育委員会2019）。ただし、土偶については、「土偶とその情報」研究会の平成8（1996）年シンポジウム資料集で既に報告されていて、本稿でも資料化されている（(2)第2表2082～2085）。シンポジウム資料集に観察表はないが、今回特に新たに分かった事実もないないので割愛する。なお、1点だけ今回新たに報告された「土偶脚部？」という小破片があるが、写真もなく、土偶と見なす積極的な理由もないので、これについても割愛した。

・南三陸町大久保貝塚（第14表5305～5306）（宮城県教育委員会2019）

東日本大震災で被災した国道の仮設道路建設のための確認調査の報告である。397m²調査され、縄

文時代晚期後半の貝層・遺物包含層が検出された。掲載土器は大洞C 2～A1式に限られるようだが、量が多く、半拠点集落だろうか。

・栗原市山王廻遺跡（第14表5307～5327）（弘前大学2021）

1965（昭和40）年の小学校体育館建設に伴う東北大学の調査出土遺物の報告で、現在三分冊まで刊行され、Iは漆器編、IIIは土器編1（西区Ⅲ層・IV上層出土土器編）となっている。弘前大学の関係者には頭が下がるが、土偶については、本文中に誤植があり（註1）、また、遺物観察表にほぼ法量しか書かれておらず、付着物の有無等細かい観察事項に不明瞭な点がある（註2）。図中に盛り込んだので割愛したのかもしれないが、観察表を添付するなら、明瞭に示していただかないと有り難い。

土偶は22点あり（同一個体1）、意外に大洞A 1式期までの古い方がほとんどを占める。この点からも、この地域の土偶が、弥生時代中期の消滅（金子2015c : p.72、金子2017a : pp.40～44）に向けて晩期末以降衰退し始める状況が読み取れるのかもしれない。単に出土土器の傾向に符合しているだけかもしれないが、一部層の土器の報告書しか出ていない現時点では、わからない。

関連遺物として、岩版5点、土版5点（円形無文1点除く）、石剣類68点、獨鈷石4点、土製耳飾53点、石製玉類31点、土製玉類789点、円盤状石製品343点、鹿角製腰飾2点、漆塗具（イシガイ科？）製品4点などがあるとされる。岩版、土版は、稻野彰子氏の編年（1983）によれば、4類が1点（岩）、5類が5点（岩3）、6類が4点（岩1）である。土製玉類のうち399点は、瓢箪小玉（金子2006）である。三角玉（「V字形垂飾」含む）は4点で、全て中間型と推測され大洞A'式古～新期の可能性がある（金子2011b）。土製耳飾は、大洞C 2式新期～大洞A 1式期と思われるC 2ネジ形（角型）（金子2010b）が主で39点、その他の14点は、白状、猪口状で、より古い晩期中葉（あるいはそれ以前も）のものも含まれるようである（金子2009）。報告書Iの漆器編（2020年）では、漆塗拂42点、腕輪26点、耳飾12点などが資料化されている。

・大崎市いもり塚周辺遺跡（第14表5328～5340）（大崎市教育委員会2021）

は場整備事業に伴い範囲確認調査を実施し、事業によって影響を受ける範囲について事前調査等を行っている。調査区はトレーナー状で詳細な面積は不明。縄文時代晚期後葉～弥生時代前期末の集落跡が発見されているが、遺物包含層を主体とする。当該期の土器は、僅かな縄文時代後期末以外では、大洞A 2式～大洞A'式新期しか見られないようで、大洞A'式古期が最も多いようである。

土偶は13点出土している。結髪土偶あるいは刺突文土偶の範疇に入るものがほとんどだが、劣品が多い。第14表5334は結髪土偶の可能性もなくはないが、いずれにしても大洞A 1式期の可能性が高く、明確な大洞A 1式土器が見られないという出土状況に符合しない。報告書第42図5は、雑なつくりだが、剥離の仕方から土器の脚と判断して割愛した。第96図5の「土偶？」とされている紡錘状土製品は、整形具合から結髪土偶かとも思われたが、それらしい部位を特定できず割愛した。

・大崎市北小松遺跡（第14表5341）（宮城県教育委員会2020）

前回取り上げるべき資料だったが、本遺跡の報告があるとは気づけず遺漏した（付章として盛り込まれている）。は場整備事業に伴い幅2～3 mのトレーナーを75か所設定し確認調査したものである。遺構は検出されず、縄文土器、土偶、土師器、須恵器が出土し、本土偶のみ掲載されている。

・大崎市通木田中前遺跡（第14表5342～5343）（大崎市教育委員会2021）

は場整備事業に伴う範囲確認調査である。約8,062m²トレーナー調査で遺構検出が行われ、一部本調査が行われているようである。基本土層V層（当時湿地）から縄文時代晩期末～弥生時代前期の遺物が出土し、古墳時代、古代、中近世の遺構も検出された。当該期の土器は、大洞A 2式～青木畳式。

・大崎市お椀子山遺跡（第14表5344）（大崎市教育委員会2019）

は場整備事業に伴う確認調査で、約1,082m²トレンチ状に調査された。主として奈良時代の遺構が検出され、土偶も、この時期の溝跡から出土している。図化できない程度の縄文土器破片が出土し、これらの遺物は周囲からの流入と考えられている。出土した土偶の体形は、ずんぐりして、どちらかと言えば結髪土偶に近いが、腰以外の場所に刺突が施されているので刺突文土偶の範疇を考えた。

・仙台市川前遺跡（第14表5345～5347）（仙台市教育委員会2018）

土地区画整理事業に伴い240m²調査された（幅5mのトレンチ状調査区）。大洞C2式期を主体とする二枚の遺物包含層、大洞B2式期を主体とする遺物包含層が検出され、その下で縄文時代後期末～晩期初頭の集落跡（住居3棟）が発見された。当該期の土器は、瘤付土器第IV段階～大洞A1式期？（大洞C2式第V段階？）（高橋1993）で、大洞C2式古期がほとんどを占め、次いで大洞B2式で、その他の時期はあまり多くない。

土偶は4点出土しているが、第347図9は、短い棒状の破片で、土偶かどうか確証が持てないので割愛した。第14表5346は首を凹ませず沈線で区画するのみのもので、同様のものが宮城県北部に見受けられ（金子2011a：第2表2042、2059）、いずれも大洞C2式前半に位置づけられる。宮城県の地域的な土偶と言えるだろうか。出土した岩偶1点は、土偶と全く無関係の独自のデザインである。

（6）山形県

・大蔵村上竹野遺跡（第14表5348～5351）（（公財）山形県埋蔵文化財センター2019）

国道バイパス建設により5,119m²調査し、縄文時代後期後葉（瘤付土器第II、III段階）、弥生時代前期末～中期前半の集落跡が主に発見され、当該期では、大洞A2式以降の土器が多く、大洞B1？、C1～2式土器が僅かに見られる。土偶以外は石剣類が4点程度で、他は装身具のみである。結髪土偶の方が多い山形県あるいは日本海側なのに（金子2020b、2021b：p.15）、この遺跡からは刺突文土偶しか出土していない。本稿(2)第2表2142例も同様だが、その実測図が本報告書に掲載されている。

（7）福島県

・富岡町毛葦館跡（第14表5352）（福島県教育委員会ほか2020）

県道建設に伴い10,000m²調査された（幅約40m）。城館跡だが、弥生時代中期後半の集落跡（住居12棟）なども検出されている。弥生時代中期の土偶（本稿(2)第2表2245）で有名な毛葦遺跡に隣接している。土偶1点も、弥生時代中期後半の堅穴住居跡から出土しているが、覆土の上層であり、その特徴からも、そこまで下るとは思えない。ただし、晩期末の土器の掲載はない。

・楢葉町高橋遺跡（第14表5353～5354）（楢葉町教育委員会2019）

震災後に計画された地域開発事業に伴う大型建物建設予定地約4,000m²の発掘調査報告で、後期中葉の男性土偶で注目を集めた。縄文時代後期中葉～晩期末、奈良～平安時代の集落跡が主に検出された。縄文時代の集落跡は、時期による盛衰が著しく、後期中葉が最も繁栄し、晩期前葉以降は概ね衰退する。したがって表にした土偶は三点あるが（5354は同一個体二点）、時期による遺跡の評価を違えた。また、土偶は全部で42点出土し、これ以外にも該当土偶が存在する可能性もあるが、無文のものは判断できない。ただし、他の土製品も含め、三点以外のほぼ全て後期に収まるものと考える。

4. これまでの遗漏資料（本稿(6)以前に報告された資料の遗漏分）

青森県つがる市亀ヶ岡遺跡（第15表5355～5364）、八戸市是川（第15表5386～5391）出土品（国立歴史民俗博物館2015）は、青森市在住だった田中忠三郎氏から購入もしくは入手したコレクションの一部の報告である。資料番号が長いので、掲載箇所欄では共通部分を省略している。青森県南部町吉荒町遺跡出土資料（県道改築に伴う県調査）については、本稿(6)で取り上げているが（第12表4551

～4555）、引用文献が漏れていたので本稿に示しておく（青森県教育委員会2015）。福島県福島市大平・後間遺跡（第10表4455～4456）についても同様である（福島市教育委員会2005）。福島県相馬市東羽黒平遺跡出土資料（第10表4472）もある（福島県教育委員会ほか2015）。

・青森県弘前市清水森西遺跡（第15表5365～5369）（工藤1978）

前節の新報告資料で、本報告の存在を知った。掲載誌も渉猟していたはずだが、「土器」という題名とほとんどが土器の細かく詰め込まれた図の最後の中段に土偶があったため、見逃したのであろう。前節の新報告とあわせ土偶10点となり、青森県垂柳遺跡、秋田県横長根A遺跡と並んで、弥生時代中期の土偶多出遺跡の一つとなる（金子2017a）。工藤国雄氏の報告では、土玉も8点掲載され、そのうちの4点は花弁平玉のようであり（金子2011c）、これまた重大な遺漏であった。

・青森県旧平賀町大光寺城(2)遺跡（第15表5370）（平賀町教育委員会1988）

住宅建設に伴い216m調査された。調査面積が狭いこととあって詳細不明である。立地は、舌状台地（報告書：p2）あるいは「なだらかな丘陵」（同：p20）で、周囲は低湿地である。平安時代の集落跡と中世居館（堀跡）が主に発見され、総数70点ほどの弥生時代中期中葉の土器片に縄文時代後期前葉の土器片が1点出土した。弥生土器のほとんどは、堀跡から出土し、土偶も同様である。田舎館式土器の「器種がほそろっている」と土偶が出土している事から、丘陵を利用した小規模な集落が形成されていたものと思われる。土器に粉や炭化米と思われる痕痕が認められることから、周辺の低湿地を水田に利用して稲作をおこなっていたものと思われる」（報告書：p2）とされる。

・青森県旧平賀町石郷(1)遺跡（第15表5371～5372）（平賀町教育委員会1995）

消防屯所建設により48m調査された。本稿(6)で収集した、1974（昭和49）年調査地点から約200m離れた地点のことである。時期・性格とも同様の成果が得られているが、調査面積が狭いためか、同じ遺跡なのかどうか明らかにしていない（註3）。夥しい遺物が出土したとあるため（報告書：p5）拠点集落と判断したが、遺構は、晚期前葉（大洞B 2式？）らしい土器埋設遺構1基のみである。瘤付土器第II段階～大洞B C 2式が出土しているようだが、瘤付土器第III段階が主に掲載されている。

・青森県青森市篠原遺跡（第15表5373～5376）（青森市教育委員会2006）

土偶が地点ごと別々に掲載され、さらに縮尺が小さく（写真図版は小さすぎて見えない）、見逃した。農道敷設に伴い約250m調査され（幅約3m）、縄文時代晚期？の土器埋設遺構6基などが検出された。縄文時代後期前葉の土器が最も多く掲載され、ついで晚期前～中葉大洞B 2～C 1式である。

・青森県平内町機の木遺跡（第15表5377～5385）（成田2015）

あまりに図に難があるため資料に含めるのに躊躇した。しかし、他の報告に同様のものがないわけでもなく、何より“実測図のあるものは資料に含める”という原則に反するので、今回資料に含めることとした。『青森県史資料編考古2』（2013年）中の写真を頼りに解説したが（p.429）、図2の4と図3の6、図4の9の写真はなく、誤解している可能性もある。図4の10は、「土偶とその情報」研究会（1996）の資料集で、北中野とされている資料と分かったので（本稿(2)第2表1148）、重複を避けるため割愛する。補足すると高さ9cm。また、図4の11～15は、報告者が直接観察しておらず、写真トレースしただけのようなので割愛した。前節(1)機の木遺跡資料参照。

・青森県八戸市荒谷遺跡（第15表5392）（八戸市2007）

本来本稿(6)第8表で取り上げるべき資料だったが、報告書掲載遺物が写真を基本としていたため失念した。大型遮光器土偶や結髪土偶、刺突文土偶も掲載されているが、写真のみである。

合併前の村道改良に伴う事前調査で1,910m調査され、野外調査、報告書作成とともに、大変な苦労を乗り越えて行われた。調査区は新井田川に沿い、縄文時代前期後葉～中期前葉の集落跡（住居7）、

後期後葉～晩期前葉の集落跡（住居6以上）、晩期末～弥生時代前期末の集落跡（大規模配石遺構）、平安時代の集落跡（住居2）が主に発見されている。当該期の揭載土器は、瘤付土器第Ⅲ段階～青木畠式で、大洞A'式新期が最も多く、次いで大洞B C 2式で、瘤付土器第Ⅲ段階、晩期中～後葉は僅かである。瘤付土器第Ⅳ段階～大洞B 1式古？期の堅穴住居内の小穴内から屈折像A類土偶が出土している。報告書では縮尺が不明瞭なので、「青森県史資料編考古2」（2013年）内の縮尺に従った。

・岩手県花巻市不動Ⅱ遺跡（第15表5394）（花巻市教育委員会2007）

土偶の図がわかりにくく、遺跡も本来平安時代の集落であったため見落とした。一帯では土地区画整理事業に伴う発掘調査が継続して行われ、この第14次調査区1,202m²は、西側に隣接する不動Ⅰ遺跡に近い。不動Ⅰ遺跡の東半の北側緩斜面では、縄文時代晩期の集落跡が検出され、不動Ⅱ遺跡は平安時代の拠点的な集落跡を主とするが、今回は不動Ⅰ遺跡から連続する晩期集落跡も検出された（炉跡2、埋設土器11）。縄文土器は、瘤付土器第Ⅳ段階？、大洞B 2式～A 1式？が掲載され、大洞B C 2式と大洞C 2式が多いが、なぜか大洞C 2式は粗製土器がほとんどである。

・岩手県旧前沢町川岸場Ⅱ遺跡（第15表5396～5397）（前沢町教育委員会2002）

本稿5)に県埋蔵文化財センターの調査資料がある。報告書が県埋蔵文化財センターになく見落としていたものだが、第15表5396は、重大な遺漏であった。出土した弥生時代遺物包含層掲載土器のはほとんどは、中期中葉川岸場式（石川2005）だからである。確かに、背中の刺突文が肩両端に続き、胸の刺突列が乳房にかかるなど、弥生時代中期前半の特徴に共通し（金子2015c：p.71）、脇腹の区画は岩手県橋本遺跡の弥生中期後葉の例（本稿1)第1表1021）につながるものである。弥生時代中期前葉谷起島式中期に当地域の土偶はいったん消滅すると考えたのは早計であったか（金子2017a）。しかし、同じ包含層から出土したらいい5397は、弥生時代前期末以降に下ることはあり得ず、撤回するには、もう少し様子を見たいと思う。

・岩手県平泉町中村Ⅱ、Ⅰ遺跡（第15表5398～5403）（平泉町教育委員会2002）

「縄文とやきものの時代村」事業に伴う内容確認調査（トレンチ式）の概報である。出土量の割に掲載遺物が少なく、後期前～中葉の土偶も多いので注意を要する。個々の遺物の記載は僅かである。土偶のほか、5類（稲野1983）の土版破片1点などが出土している。

・秋田県横手市オホン清水遺跡（第15表5404～5406）（横手市2007）

表掲資料の報告である。遺跡は、ほ場整備に伴い市により調査され報告書も刊行され、結髪土偶が掲載されているようだが、近くに報告書がなく資料化できていない（本稿6）：p.39）。

・宮城県大崎市矢根八幡遺跡（第15表5407～5417）（大崎市教育委員会2015）

ほ場整備に伴って行われた調査報告である。工事に先駆けて範囲確認調査を行い（1,168m²）、その後、排水路掘削予定部分の本調査（4,087m²）、作業用道路部分の確認調査（2,480m²）が行われた。いずれも幅3m程度のトレンチ状調査である。土偶が出土したのは全て本調査区で、約160mの範囲に比較的の近接している。第15表5407～5413が出土したI調査区では、比較的多くの土器が出土し、縄文時代後期中葉～大洞A 2式が見られるが、晩期前葉は僅かで大洞A 1式がほとんどを占める。5414～5416が出土したJ調査区では、出土時期にあまり違はないが前半の方が多く量は少ない。5417が出土したN調査区では、大洞C 1～A 2式が出土し、大洞A 1式の割合が他より高い。

第15表5407は、大型遮光器系統と結髪土偶の折衷土偶。5407と5408は、接点はないが同一個体の可能性が指摘されている（報告書：p.206）。5417は、大型遮光器土偶の左類として復元されている。写真を見ると違和感をぬぐえないが、摩耗しているためか。ただし、違うとも言えず、周囲から出土した土器も同時期のものがあるので、資料に含めた。報告書第41図4は、磨消縄文と刺突列から後期中

葉の土偶と判断し、5は土偶の「頭頂部突起」に見えないので（土器の突起？）、割愛した。

・福島県広野町上田郷VI遺跡（第15表5419）（福島県教育委員会ほか1999）

常磐自動車道建設に伴って行われた第1次分（5,800m）の調査報告である。遺跡は上下二段の河岸段丘に広がり、高い方を中心に、縄文時代早期～前期初頭、前期後葉の集落跡が主に検出された。土偶1点は、低い方に検出された遺物包含層から出土し、この包含層も早期～前期初頭を主体とするが、晩期後葉～末、弥生時代などの土器小片も混じる。東に隣接する2次調査区では、晩期後葉～末の土器は、もう少しまとまつた量が出土している（福島県教育委員会ほか2001）。

・福島県いわき市薄磯貝塚（第15表5427）（いわき市教育委員会2014）

震災復興土地区画整理事業に伴って行われた試掘（トレンチ）調査の報告である。貝類は伴わないが遺物包含層が検出され、出土土器は、縄文時代後期後葉～晩期後葉？、弥生時代前～後期、土師器、須恵器、かわらけで、当該期で出土量の多いのは、大洞C2式、次いで大洞B1式で、大洞B2式、A1式は少ない。土偶は1点出土し、「薄磯貝塚A地区の調査では後期に属する土偶が4点出土しているが、晩期と考えられるものは本例のみである」とされる（報告書：p.174）。

5 小括

新報告資料は、多くが復興調査で出土したものである。長く待望されていた青森県櫻の木遺跡と宮城県山王廻遺跡の資料が報告された。弘前大学は、山王廻遺跡以外にも精力的に未報告資料の図化作業を進めていて大変ありがたい。青森県清水森西遺跡、岩手県川岸場II遺跡の弥生時代中期資料が注目される。川岸場II例は、もし中期前葉とすれば、編年（金子2017a）の変更を余儀なくされる。

註

(1)「22は左腕部で肩部に渦巻き文を入れる。23は右腕部で、肩先にはB突起がある」（報告書：p.83）。22は5、23は6の間違いかと思ったが、「5～7は上脚部の一部である」とある。

(2)本稿第15表5316は、写真図版を見ると赤色付着物らしきものが認められるが、本文にも觀察表にも触れられていない。

(3)遺跡が所在する平川市郷土資料館の展示では、1974年の調査地点は石郷4号遺跡とされていた（2019年11月17日見学）。『青森県史』（青森県2013）でも同様である。

(4)「頭部がd98区、胴部はd0区から出土した」（報告書：p.82）。1グリッドは5m区画である。

(5)同時期の土器の出土もほとんどないが、北区に近い時期の墓があつて（110号土坑）、標高の低い調査区外に捨て場等が存在する可能性もあり、単純に小規模集落以下とみなすこともできない。

(6)報告書に実測図が掲載されているのは、調査で出土した下半身のみだが、地権者が採集した上半身と接合することが判明しており、本稿の觀察結果（表1）は全身像についてである。「上半部を採集した地権者の畠地は、遺跡の西側にあったといわれ、発掘地点はある程度離れていた可能性がある」（報告書：p.185）。細身で胴長、口の周りの人差し指表現や腰に帯状の文様縁帯を持つ等、基本形は「後期以来」の伝統的な土偶であるが、胴部全体に土器と同様の唇消縄文を持つこと（ただし側面は無文）や下腹部、眉～鼻の表現、そして何より遮光器眼を持つことが大型遮光器土偶と共通する。しかし、首の表現や乳房が小さいこと、古期の大型遮光器土偶の特徴であるパンツ状表現を持たないこと、何よりも中実であることが大きく異なる。頭部は、空洞ではあるが、通常の輪積中空ではなく、球形の椀に顔を付けたような製作方法で、後頭部が開き、その縁には土器のような突起列が巡る。後期以来の伝統的な土偶が大型遮光器土偶の影響を受けた例と位置づけることができようか。このままでも自立するらしいが（報告書：p.180）、明らかに立てたための工夫が認められることが注目される。それは、「左右の足裏には長椭円の孔があり、径を減じながら腰部下端まで入り込んでいる」（報告書：p.181）ことである。足隕丸長方形、爪先刻目4。

(7)本稿でも取り上げた晩期の拠点集落山田町浜川目沢田I遺跡の報告書によれば、縄文時代前中期の大集落の多い山田町は、後晩期に遺跡自体が激減し、浜川目沢田I遺跡以外では、畠中遺跡のみで、「多量の遺物が出土している」とされる（（公財）岩手県文化振興事業団2018：p.5）。しかし、報告書掲載遺物を見る限り首肯しがたい。ただし、立地が山田湾で浜川目沢田I遺跡の対岸に位置していることや晩期で長期にわたる遺物が掲載されているので、拠点集落の可能性は高い。

(8)頬の表現、首飾状突穴列が、岩手県東裏遺跡の屈折像B類土偶に酷似しており（金子2021b：第3図10）、この時期の

- 屈折像B類には、頭頂部が円表現となっているものもある（金子2021b：第3図8）。
- ⑨乳房が丸い貼付であることや脇腹のつ字文、背中の文様が左右に分かれ、つ字状であること、その間に6字文が施されているのは新しい要素、正中線と6字文が刺痕列で表現され、パンツの経状区画線が腰の後ろに伸びているのは古い要素で、乳房以外は大洞A1式新規と判断するのが妥当と思われる。乳房表現は、この時期の原則に則っていないのだろう。
- ⑩時期を特定するのが難しい異形の土偶だが、下腹の丸い貼付の上に刺突を施す表現から判断した。類例として本稿6第8表4220があり、さらに中期と見なされることの多い秋田県東福寺村上遺跡例がある（「土偶とその情報」研究会1994：秋田団版47の4）。
- ⑪抽象的な板状土製品で、資料報告では「土版型土製品」とされている。しかし、乳房の箇所に貫通孔を持つのは、この時期の土偶の特徴で、背面背中部分に大柄な工字状文を持つのも同様である。表裏全体に8条の平行沈線を持ち、その間に刺突列を施している。上端は広がり波打っているようで、下端は凹んでいる。
- ⑫透光器土偶の出土から、それなりの格の遺跡と思われるが、調査面積が約250m²と狭いせいか、調査区全体に遺構面上部が大きく搅乱されているためか、掲載土器も少なく、はっきりしない。
- ⑬トレンチ状の調査で全容が掴めない。出土土器は、大洞C2～A1式が多いが、大洞BC2式も比較的多く、数はそれほどでもないが、後期から継続して大洞A2式まで見られ、拠点集落か半拠点集落か悩む。

参考文献

- 青森県 2013 「青森県史 資料編 考古2 縄文後期・晩期」
- 青森県教育委員会 2015 「劍吉荒町遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第558集
- 2016 「金沢街道追1遺跡・新沢1遺跡・新沢2遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第563集
- 2017 「道伝鹿羅遺跡II・下平塚遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第586集
- 青森市教育委員会 2006 「県原遺跡発掘調査報告書」青森市埋蔵文化財調査報告書第89集
- 秋田県教育委員会 2015 「小勝田館跡」秋田県文化財調査報告書第500集
- 石川日出志 2005 「弥生中期谷起島式に後続する磨削繩文土器群」[岩手考古学]第17号 岩手考古学会
- 稲野彰子 1983 「岩版」[縄文文化の研究第9巻 縄文人の精神文化]雄山閣
- いわき市教育委員会 1993 「久世原跡・番匠町遺跡」いわき市埋蔵文化財調査報告書第33冊
- 2001 「横山B遺跡」いわき市埋蔵文化財調査報告第77冊
- 2014 「震災復興土地区画整理事業地内試掘調査報告2(薄磯地区)」いわき市埋蔵文化財調査報告第160冊
- 岩手県教育委員会 1979 「東北縄貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書I」岩手県文化財調査報告書第31集(木賊川遺跡)
- 1979 「東北幹線関係埋蔵文化財調査報告書II」岩手県文化財調査報告書第34集(高松道路)
- 2016 「岩手県内遺跡発掘調査報告書(平成26年度 復興関係)」岩手県文化財調査報告書第146集
- (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2016 「宮野貝塚発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第649集
- 2016 「向日田III遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第657集
- 2018 「乙部野II遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第682集
- 2018 「新川日出志II遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第689集
- 2021 「宿戸遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第726集
- 大崎市教育委員会 2015 「矢根八幡遺跡」宮城県大崎市文化財調査報告書第21集
- 大崎市教育委員会 2019 「お椀子山遺跡」宮城県大崎市文化財調査報告書第35集
- 大崎市教育委員会 2021 「通木田中前遺跡」宮城県大崎市文化財調査報告書第41集
- 大崎市教育委員会 2021 「いもり塚周辺遺跡ほか」宮城県大崎市文化財調査報告書第43集
- 大船渡市教育委員会 2015 「岩手県大船渡市 宮野貝塚 平成25年度緊急発掘調査報告書」
- 大船渡市教育委員会 2016 「岩手県大船渡市 宮野貝塚 平成23・24年度緊急発掘調査報告書」
- 大船渡市教育委員会 2016 「岩手県大船渡市 大船貝塚 長洞遺跡 平成27年度緊急発掘調査報告書」
- 大船渡市教育委員会 2018 「岩手県大船渡市 長谷堂貝塚群 平成26年度緊急発掘調査報告書」
- 大船渡市教育委員会 2020 「岩手県大船渡市 長谷堂貝塚群 平成26年度緊急発掘調査報告書」
- 大船渡市教育委員会 2021 「岩手県大船渡市 災害復興関連 試掘・立会調査報告書」
- 金子昭彦 2006 「東北地方北部における縄文晩期の『装飾品』(1)『紀要』XXXV 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター」
- 金子昭彦 2009 「縄文晩期・東北北部の土製耳飾」[縄文時代]第20号 縄文時代文化研究会
- 金子昭彦 2010a 「東北地方・縄文晩期の土製耳飾」[縄文時代]第21号 縄文時代文化研究会
- 金子昭彦 2010b 「縄文晩期・東北北部の土製耳飾(続)」[縄文時代]第21号 縄文時代文化研究会
- 金子昭彦 2011a 「東北地方・縄文晩期の土製耳飾(2)」[紀要]XXX (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 金子昭彦 2011b 「北日本・縄文晩期の三角玉ほかの装飾品」[岩手考古学]第22号 岩手考古学会
- 金子昭彦 2011c 「北日本・縄文晩期の花弁丸玉、平玉」[縄文時代]第22号 縄文時代文化研究会
- 金子昭彦 2012 「東北地方・縄文晩期の土偶(3)」[紀要]XXXI (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 金子昭彦 2014 「東北地方・縄文晩期の土偶(4)」[紀要]第33号 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 金子昭彦 2015a 「東北地方・縄文晩期の土偶(5)」[紀要]第34号 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 金子昭彦 2015b 「大洞C2式期・大型透光器系列土偶の概年」[古代]第137号 早稲田大学考古学会

- 金子昭彦 2015c 「縄文土偶の終わり」『考古学研究』第62巻第2号 考古学研究会
- 金子昭彦 2016 「東北地方・縄文晚期の土偶[6]」「紀要」第35号 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 金子昭彦 2017a 「弥生時代の縄文土偶」『青森県考古学』第24号 青森県考古学会
- 金子昭彦 2017b 「東北地方「亀形土器品」の一類型」「縄文時代」第28号 縄文時代文化研究会
- 金子昭彦 2019 「東北地方・縄文晚期の土偶関連遺物[4]」「紀要」第38号 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 金子昭彦 2020a 「東北地方・縄文晚期の土偶関連遺物[5]」「紀要」第39号 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 金子昭彦 2020b 「亀ヶ岡式的な土偶の広がり」「D O G U」第3号 土偶研究会 (青森県成田滋彦氏)
- 金子昭彦 2021a 「東北地方・縄文晚期の土偶関連遺物[6]」「岩手考古学」第32号 岩手考古学会
- 金子昭彦 2021b 「亀ヶ岡式土偶に関する諸問題」「D O G U」第41号 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 釜石市教育委員会 2019 「原形遺跡発掘調査報告書1」釜石市埋蔵文化財調査報告書第35集
- 工藤国雄 1978 「弘前市清水山西遺跡出土の鐵繩文式土器」「考古風土記」第3号 青森県鈴木克彦氏
- 国立歴史民俗博物館 2015 「亀ヶ岡遺跡・足山遺跡・繩文時代遺物」国立歴史民俗博物館資料図録11
- 国立歴史民俗博物館 2022 「櫻の木遺跡出土品」国立歴史民俗博物館資料探録12
- 七ヶ浜町教育委員会 2019 「二月田貝塚第3次調査 東宮貝塚第2次調査」七ヶ浜町文化財調査報告書第12集
- 仙台市教育委員会 2018 「霞治屋敷A遺跡・富沢船跡・川前遺跡ほか」仙台市文化財調査報告書第466集
- 高橋龍三郎 1993 「大洞C 2式土器細分のための諸課題」「先史考古学研究」第4号 阿佐ヶ谷先史学研究会 (青森県) つがる市教育委員会 2019 「史跡亀ヶ岡石器時代遺跡発掘報告書」つがる市遺跡調査報告書11
- 「土偶とその情報」研究会 1994 「土偶シンポジウム秋田大会 東北・北海道の土偶I」
- 「土偶とその情報」研究会 1996 「土偶シンポジウム宮城大会 東北・北海道の土偶II」
- (福島県双葉郡) 桥栄町教育委員会 2019 「高橋遺跡(第1次調査)」橋栄町文化財調査報告書第19集
- 成田滋彦 2015 「青森県平内町櫻の木遺跡の土偶」「青森県考古学」第23号 青森県考古学会
- 横岸洋 2021 「紀元前一千紀前半の気候変動期における縄文晚期社会システムの変容プロセス」国際教養大学
- 八戸市南郷区役所建設課 2007 「荒谷遺跡」八戸市南郷区埋蔵文化財調査報告書
- 八幡平市教育委員会 2017 「松尾釜石塙石列石-1953年発掘調査の記録-」
- 花巻市教育委員会 2007 「不動II遺跡第14次発掘調査報告書」花巻市埋蔵文化財発掘調査報告書第2集
- 花巻市教育委員会 2018 「賃貸住宅建設関連遺跡発掘調査報告書」花巻市埋蔵文化財発掘調査報告書第23集
- 平泉町教育委員会 2002 「長島中村地区発掘調査報告書」岩手県平泉町文化財調査報告書第80集
- 平賀町教育委員会 1988 「[日大光寺城]遺跡発掘調査報告書」平賀町埋蔵文化財報告書第17集
- 平賀町教育委員会 1995 「[石郷]I遺跡発掘調査報告書」平賀町埋蔵文化財報告書第21集
- 弘前大学人文社会科学院北日本考古学研究センター 2017 「八郎潟沿岸における縄文時代晚期末の研究」
- 弘前大学人文社会科学院北日本考古学研究センター 2018 「八郎潟沿岸の亀ヶ岡文化」
- 弘前大学人文社会科学院北日本考古学研究センター 2019 「岩木山麓における弥生時代前半期の研究」
- 弘前大学人文社会科学院北日本考古学研究センター 2021 「[国史跡]山王廻遺跡の研究II 石器・石製品・土製品・骨角器編」
- 福島県教育委員会ほか 1999 「常磐自動車道遺跡調査報告18」「福島県文化財調査報告書第356集
- 福島県教育委員会ほか 2001 「常磐自動車道遺跡調査報告22」「福島県文化財調査報告書第375集
- 福島県教育委員会ほか 2015 「[一般国道15号]相馬福島道路跡発掘調査報告1」「福島県文化財調査報告書第500集
- 福島県教育委員会ほか 2020 「県道広野小高線関連遺跡発掘調査報告2」「福島県文化財調査報告書第538集
- 福島市教育委員会 2003 「郡山遺跡」福島市埋蔵文化財報告書第162集
- 福島市教育委員会 2005 「大平・後間遺跡3」「福島市埋蔵文化財報告書第177集
- 藤沼邦彦 2013 「29 櫻の木遺跡」「青森県史 資料編 考古2 縄文後期・晩期」 青森県
- (公財)北海道埋蔵文化財センター 2017 「木古内町 大平遺跡4」「(公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第329集
- 前沢町教育委員会 2002 「川岸塙II遺跡発掘調査報告書」「大室屋敷跡木家墓地調査報告書」岩手県前沢町文化財調査報告書 第13集
- 宮城県教育委員会 2019 「大久保貝塚ほか」「宮城県文化財調査報告書第250集
- 2020 「田子山西遺跡II」「宮城県文化財調査報告書第252集
- (公財)山形県埋蔵文化財センター 2019 「上竹野遺跡第1・2次発掘調査報告書」「山形県埋蔵文化財センター調査報告書 第224集
- 山田町教育委員会 2020 「畠中遺跡発掘調査報告書」「山田町埋蔵文化財調査報告書第16集
- 横手市 2007 「横手市史 資料編 考古」
- 陸前高田市教育委員会 2018 「雲南・鰐沢貝塚・神崎・三日市II遺跡発掘調査報告書」「陸前高田市文化財調査報告第33集

宮古市田鎮車堂前遺跡における居館の構造と機能

福島 正和

田鎮車堂前遺跡の堀を有する12世紀代の居館は、遺構の配置やその構造を検討した結果、堀内区、東側堀外区に区分できる。検出遺構や出土遺物等の考古学的検討を経て堀内区は日常の居住域と思定される。一方、東側堀外区は東西の2つの区画に区分可能であり、東側堀外区西半の方形区画を馬事関連、東側堀外区東半を武器・武具類を含む鉄製品製作や保守管理の工房域であると推定した。また、この工房域は居館最終段階に祭祀域と姿を変える。これら居館を構成する要素とその推定される機能から、この居館の性格や成立背景を考えることができる。居館の果たした役割として、鉄製の武器・武具製作を担い、馬を飼養・管理した集団を抱えていたものと想定され、居館の主は、地域の軍事的・政治的なリーダーを想定するのが妥当である。

はじめに

宮古市田鎮に所在する田鎮車堂前遺跡では、発掘調査によって12世紀の居館の存在が明らかになつた（岩埋文 2020）。これは三陸沿岸地域において、12世紀代の堀を有する居館唯一の発見例であり、宮古地域はもとより三陸沿岸地域の重要拠点の一つであったことは言うまでもない。この調査以前も三陸沿岸地域の各地で12世紀の出土遺物の発見例はわずかながらあったが、具体的な様相を把握するにはあまりにも乏しい状況であった。しかし、田鎮車堂前遺跡の発掘調査は、その暗部に光を当てる成果が認められた。特に居館の発見は、それまで12世紀代の遺構がほとんど認められなかつたこの地域では画期的な調査となつた。

岩手県を含む北奥において12世紀という100年間は、平泉藤原氏の時代である。この藤原氏四代約100年に及ぶ権勢は北奥全土に少なからず影響をもたらしたとされている。さらに、近年津軽海峡を越えた北海道においてもその影響を示す考古学的な成果が紹介されている（八重樫 2012・2019）。筆者もこれらの研究を踏まながら、12世紀平泉藤原氏やその一大拠点である平泉と田鎮車堂前遺跡における居館の関係性も謳ひながら指摘してきた。しかし、現状では不明瞭な部分が多いのも事実である。加えて、この居館の全域が調査されていないため情報不足、材料不足の感も否めない。

12世紀代の遺構がみられないこの地域において比較・検討可能な資料も乏しいのも事実であるが、この多種多様な遺構群で構成されるこの居館の構造を整理し、検討することが現段階では肝要であると考えた。これはここ数年のうち、その基礎となるような考察をおこなってきたことで、その思索過程で思い描いたことをさらにつらうに統合させたいと考えたからである。居館の構造を考古学的に整理するために必要な情報について、この居館における重要遺構の一つである堀については以前共著論考で一定の基礎固めをおこなった（趙・福島 2021）。また、居館には雑穀用の貯蔵穴が多数伴うことも先の論考で提示したところである（福島 2022a）。特殊な遺物からも居館の機能に関わると考えた（福島 2021）。これらこの居館に関する近年の論考を土台にしつつ、この居館の遺構群から読み取ることができる居館の構造を分析する。

さらに、この居館の構造分析からその機能を導き出すことで、居館内の構造とその機能分化についても考察し、この地域、この時代に居館が担うことになった様々な役割を具体的に検討することを最終的な目的としたい。将来、この居館以外に同じような遺跡がみられた時には、これと比較・検討する素材になることも念頭に入れ、論を進めたい。

1. 居館の立地

居館の構造や機能を考えるためには、その立地も重要なファクターとなる。ここでは居館やこれを取り巻く地理的環境をまとめてみたい。

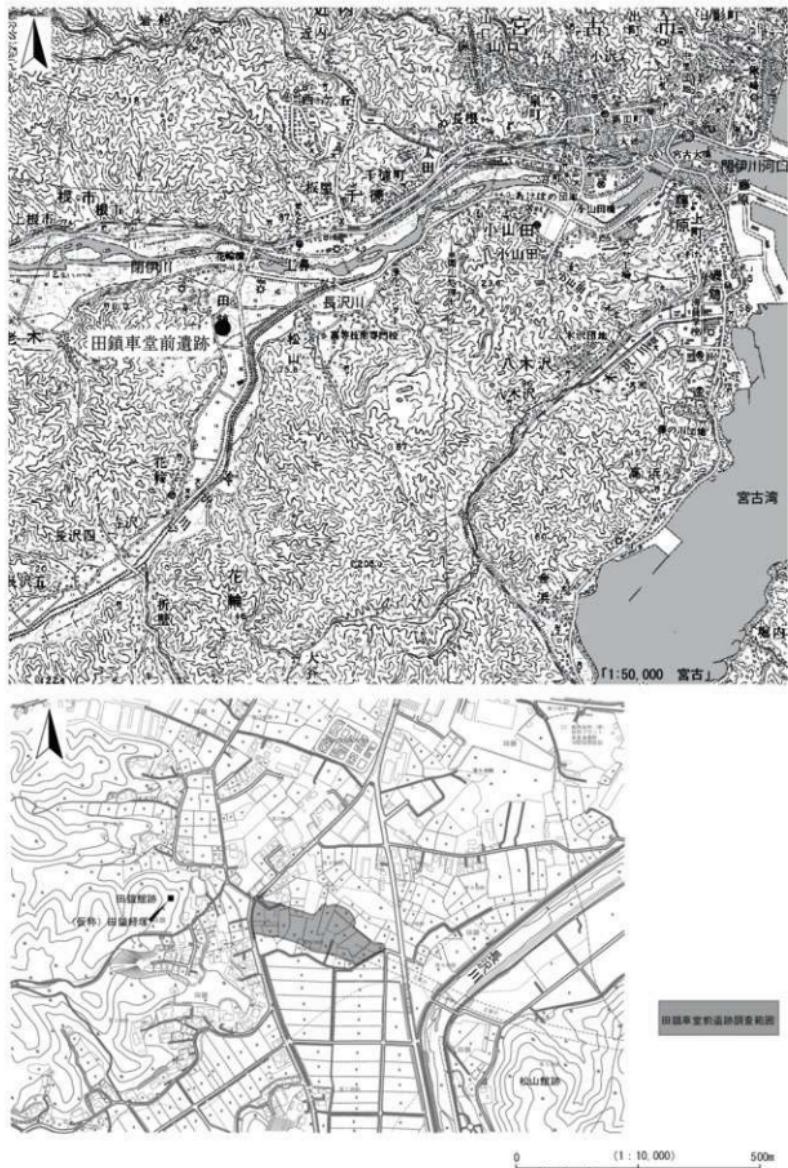
田鎮車堂前遺跡は宮古市田鎮に所在し、小字名の「車堂前」がこの遺跡名の由来である。遺跡の道路を挟んだ南西に「車堂」と呼び習わされる民家が現存しており、その眼前にある土地を指し示し、「車堂前」と称した小字名なのであろう。「車堂」は近世の地名である可能性が高く、県内にも散見される。「車」はおもに水車を表したものと推測されている（註1）。すなわち、この小字名は12世紀代の居館とは、ほぼ関連性のない地名として理解される。

遺跡は標高5～6mの比較的広い沖積平野に立地する。「比較的」としたのは、リアス式海岸で有名な三陸沿岸地域は起伏の多い地形であり、広い平野部を多く有していない。この地域では、太平洋に面した湾に注ぎ込む河川の河口部分で平野部が発達しており、このような平野部は現代においても港湾を有する中心市街地となって開発されている。田鎮車堂前遺跡の所在する宮古地域でも、西の北上山地に端を発する閉伊川が宮古湾に注ぎ込み、この地域最大河川の河口付近が現在の宮古市街地となっている。この閉伊川両岸には、これによって開析された狭小なその他の平野部が所々みられ、田鎮車堂前遺跡のある田鎮・花輪地区の平野部もこの閉伊川南岸に当たる。この田鎮・花輪地区的平野部は、閉伊川とそれに合流する支流の長沢川に挟まれている。現在、この合流地点は遺跡よりやや東に位置している。宮古湾から閉伊川を遡って約5km内陸の地点である田鎮地区は、低標高の平野でありながら平成23年3月の東日本大震災で発生した大津波の被害は免れた。しかし、発掘調査中であった平成28年8月末の台風10号等の豪雨では、この地域一帯が冠水するなどの被害があった。豪雨による急激な閉伊川の水位上昇によって、宮古湾で潮の高い時間帯に河口で淡水が吐き出せず、河口付近の平野部で溢れ出るに至った。また、長沢川との合流地点においても同様の現象によって閉伊川に吐き出せない水が合流地点周辺で大量にオーバーフローしたのである。その惨状は今もって忘れられない記憶である。このように支流長沢川の存在が、一定の広さを有する田鎮・花輪地区的平野部を沖積作用によって生み出したものと考えられる。

遺跡の周囲は低湿地に開まれており、低湿地部分では遺構・遺物が見出せないことから、12世紀當時も特に人工的な機能を加えられた低湿地ではないとみられる。このように調査範囲の東西両端部は低湿地となっており、12世紀の遺構・遺物はこれらに挟まれた東西約250mの範囲の微高地に認められる。低湿地表面の土壤では、時代は不明ながら地下茎や匍匐茎がみられたため、ガマやアシなどの湿生植物が繁茂していたのかもしれない。

田鎮車堂前遺跡の周辺には、同一事業で調査された3遺跡が所在する。田鎮車堂前遺跡から長沢川を挟んで東には丘陵があり、そこに松山館跡が位置する。発掘調査で古代・中世の堅穴住居や工房、鉄生産関連遺構・貯蔵穴群などが調査された。一方、西側には低湿地を挟んで田鎮遺跡があり、さらに丘陵裾から丘陵上にかけては田鎮館跡が位置する。これら2遺跡も発掘調査され、田鎮遺跡では12世紀の遺物がわずかにみられた。田鎮館跡では平安時代前半の堅穴住居・貯蔵穴などが多く検出されているが、1点のみ12世紀の渥美産陶器片が出土している。

さらに、田鎮館跡の調査範囲外の尾根上には、経塚と考えられる川原石を用いた高まりが現存する。田鎮車堂前遺跡の居館からみると、ちょうど真西に位置し、この居館と関連する経塚である可能性が考えられる。ちなみに、この高まりは昭和時代に岩手県教育委員会が実施した「岩手県中世城館跡調査事業」田鎮館（三合並館）の項で「物見塗と考えられる円形の高まりが残されている」とされている（岩手県教委 1986）。現在、この記載された高まりは、図示された位置や記述内容から、その経塚



第1図 田鎮車堂前遺跡の位置

の高まりそのものであると判断できる。このことから居館の西側の丘陵やその堀部分においても関連する12世紀の聖域や宗教施設などが存在した可能性を示唆している。

2. 遺構の配置とその構造

ここでは、この居館を構成する遺構群の平面的な配置からその構造についての分析をおこなう。

(1) 遺構配置と区域分割

この居館のもっとも特徴的な構造は、堀を有するという点である。堀は2条検出されており、ある時期は、部分的に二重構造であった可能性が考えられる。その他の主要な遺構は、掘立柱建物・堅穴建物などの建物類、井戸、祭祀溝・区画溝・道路側溝などの各種溝、貯蔵穴と推測される土坑類である。これら主要な遺構、特に平面的に区画を有する堀や溝の平面的な配置からこの居館を4区域に区分することができる（第2図）。

二つの堀は西側でのみ二重構造であることが確認されている。確認された2箇所の内堀コーナーには橋が架かっていると想定される。一方は土橋、もう一方は木橋を想定している。

二つの堀で囲まれた空間である「堀内区」は、もっと重要な施設が配置されていることは想像に難くない。それを裏付けるように3棟の掘立柱建物が認められる。

次に、堀の外側である外区のうち東側、長沢川寄りの空間は区画溝1が東西を分割するように南北方向に配されているため、西側の内区に近い方を「外区1」、東側の内区より離れた方を「外区2」と呼称して分割することとした。

外区1には円筒形の土坑群が密集して確認できる。これらは報告書では多く触れることができなかつたが、拙稿でその機能・性格について、その案を提示した（福島2022a）。

外区2には祭祀に関する弧状の溝、これに接続する井戸、堅穴建物が認められる。堅穴建物は調査前の試掘トレンチによって切られていたため不明な点が多いが、中世の堅穴建物に切られていることから12世紀と推測し、今回このエリアの構成遺構として組み入れた。

さらに、明確な遺構は存在していないが、外堀より西側の区域は「外区3」とした。この区域は隣接する田鎮遺跡で12世紀代の遺物がわずかに出土していることを踏まえ、田鎮遺跡も当時の活動領域として「外区3」に含めてもいいかもしれない。ただし、長大な低湿地を挟むため有効な土地利用がおこなわれたかどうかは疑問が残る。

以上、二重の堀・内区・外区1・外区2・外区3の各区域の構造を分析するため、各区域に内包される遺構の様相を概述する。

(2) 二重の堀

特徴的な二重の堀のうち、堀1は内堀で、それに対して堀2が外堀に相当すると現時点では考えている。堀の堆積状況の分析によって、内堀の先行と外堀の新設、そしてある時期の併存を確認している（趙・福島2021）、西側のみ二重構造になる時期があるものと推測される。

内堀の規模は、総延長約180m、東西長約110m、幅5～8m、深さ約2mである。調査範囲外へさらに伸びると考えられ、方形あるいは多角形など全体的な平面形状は不確定であるが、全周する可能性が考えられる。この内堀には、居館西側で改修痕跡が認められる（第4図）。内堀の改修は少なくとも一度おこなわれており、この改修の主要なポイントは内堀西辺ラインの東へのスライド、底面までの深度の増、内区側の土壠の整備である。この内堀が内側へスライドすることは、内堀で囲まれた内区の狭小化に繋がるものと考えられ、内区の様相にも少なからず影響を及ぼしたとみるのが自然である。堀本来の目的が防御であるならば、深さが増すことで防御性を高める働きがある。これは土壠

の整備も同様の効果を生む。

外堀は内堀よりやや浅いが断面逆台形でおおむね内堀と共に通する形状である。

この外堀は居館成立当初から存在せず、居館の機能途中段階で新設されている。

内堀とは異なり、出土遺物がごく少量である。また、土星崩壊土の流入が認められないため土星は付属していないものと考えられる。

先行してすでに存在していた内堀の改修を契機として、この外堀が新設されたとみられる（趙・福島 2021）。この場合、低湿地に大きく掛からないように外堀を配置するために、内堀を内区側へのスライドさせたことと調和的であり、これらが連動している可能性が高い。この外堀は調査区南側界で立ち上がりることが確認されている。この立ち上がりについては急傾斜で、この地点で堀そのものが途切れてしまう可能性と、ここに土橋が存在する可能性の両方が考えられる。仮にこれが土橋であったとすれば、内堀の土橋とは直線的な配置ではないため、後世の城館に設けられる虎口のように故意に位置を変えられているのかもしれないが、現段階では不明である。

機能停止後については、土星崩壊土の有無を除けば内堀と共に通する堆積を示しており、最終的には内堀とともに自然埋没していくものとみられる。その場合、内堀への土星崩壊土のまとまりは非常に不自然であり、土星が意図的に破壊されたことが想定できる。つまり、内堀付属の土星は自然埋没



第2図 田鎮車堂前遺跡遺構配置（12世紀中心）

が進む過程のどこかで損壊され平坦にされた可能性が高い。その時期は不明であるが、最終埋没が中世後半以前であることから、13世紀から15世紀頃までの出来事であったと推定される。

(3) 内堀に架かる二つの橋

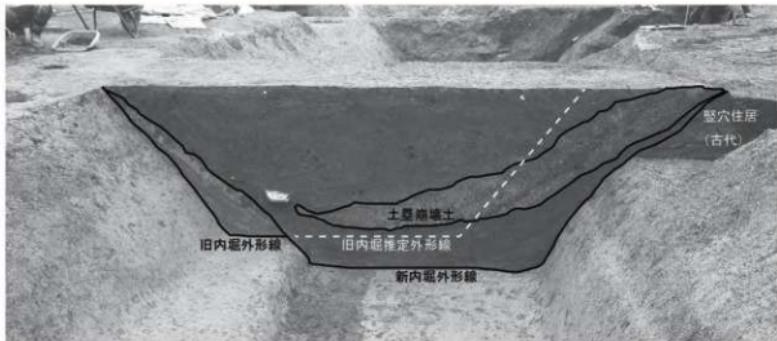
内堀には2箇所橋が存在したものとみられる。内堀南東コーナーでは橋そのものは残存していないが、堀底面で1本の木柱がみられたため木橋の存在を考えている。内堀南西コーナーでは、地山削り残しの土橋が確認されている。

木橋については、当然のことながら橋体そのものが残存していないため、橋の構造は不明である。しかし、打ち込まれていた木柱は橋の橋脚そのものではないにせよ橋を支持する材の一つであったとみられる。土橋とは位置も対照的であるが、構造も異なる点が興味深い。居館機能時に撤去される、あるいは新設されるなど構造上流動的な橋である。外区1にはこの木柱に向かうように小規模な道路側溝が認められ、橋の存在の蓋然性を高めている。

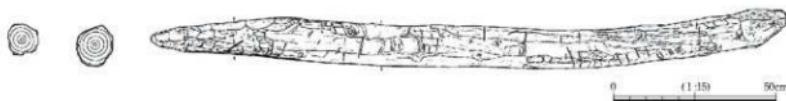
土橋については堀の検討とともに考察をおこなっている（趙・福島 2021）。土橋の平面形態は緩やかな曲線を持つ鼓形であり、それぞれの接続部分が広がる形態である。土橋北側では盛土による補強痕跡がみられた。何らかの原因でこれが崩落した結果、修復がおこなわれている。基部では杭列がみられ、盛土に際しては、杭列を用いた土留め施設が備わっていたことがわかる。この土橋の変遷は、堀・土橋の構築、土橋の拡幅工事、土橋の崩落を経て修復、というプロセスが想定された（第6図）。このような土橋の造作からみて、設計段階からこの出入り口が設定されていた点、補修がおこなわれている点、内区の主要部分に直接通じる点などからみて、居館内区の主たる出入り口だったと判断できる。ただし、付属する門の痕跡は確認されていない。

(4) 内区

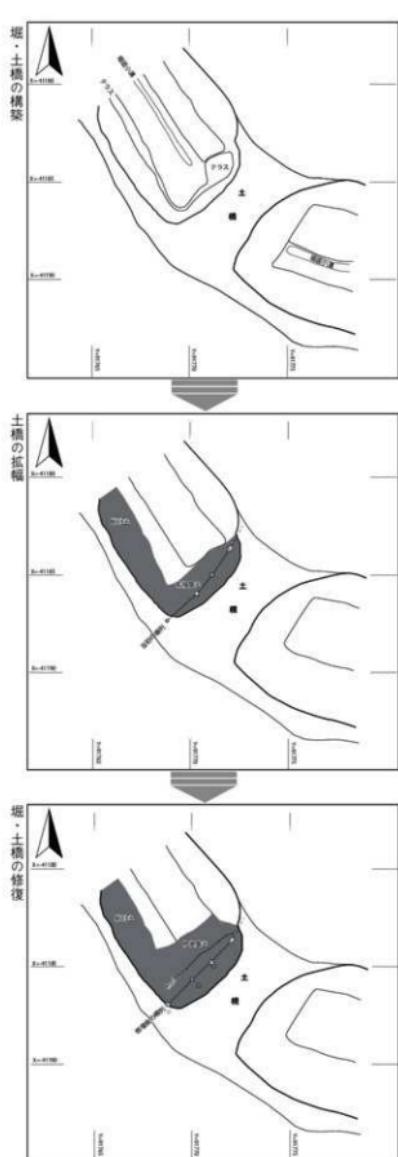
内堀で囲まれた内区は、この居館の核心区域である。内区の遺構は、3棟の掘立柱建物、4棟の堅穴建物、1基の井戸である。



第4図 内堀断面からみた変遷



第5図 内堀（堀1）検出南東隅木柱



第6図 堀1（内堀）における土橋の変遷

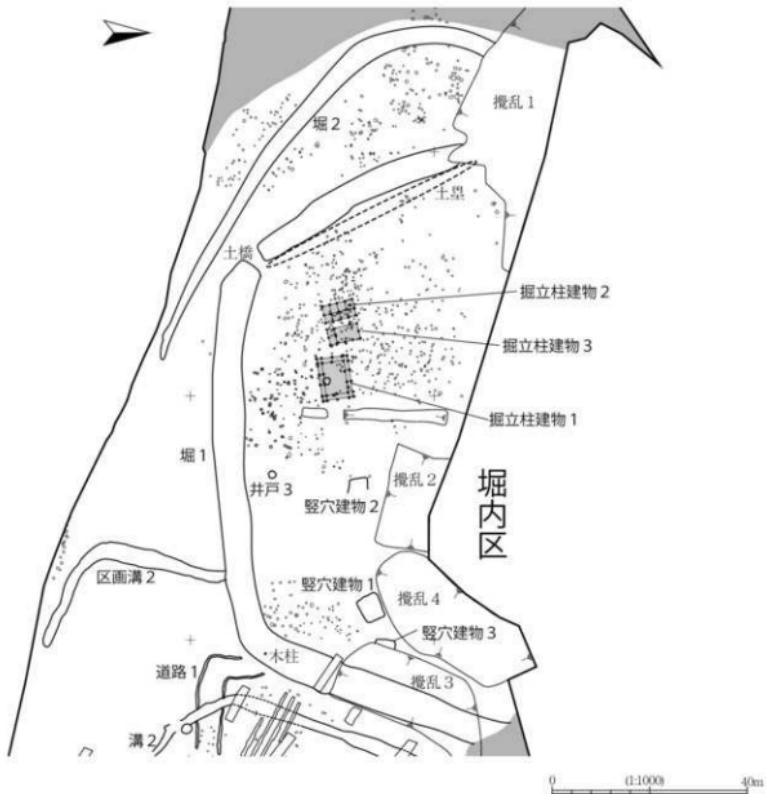
まず、掘立柱建物1は庇が全周する側柱建物である。広義の四面庇付建物である。これは外周の出が半間分のみのためである。本格的な四面庇付建物よりも格式的にやや劣る建物形式であるとみられる。また、配置が主たる出入り口である土橋側に位置している点からも、この居館の主殿ではないと考えられる。主殿は内区にあると考えられるが、調査範囲から外れた内区のどこかの箇所に存在するかもしれない。

この掘立柱建物1に付属するように2棟のやや小規模な掘立柱建物が認められる。これら2棟はそれぞれ側柱建物と総柱建物という違いはあるが、規模および軸角が一致している。かなり近接して位置していることから、同時併存を考えるのは難しい。そこで規模や軸角の一致を考慮すると、これらが同一機能を有する別時期の建物であったと想定するのが妥当である。そうなれば当然両者は同一機能建物の建て替えであることも必然である。しかし、直接的な切り合いのない2棟であるため新旧を判断するのは難しい。報告書でも記載したが、2棟のうち土星に近い掘立柱建物2は、内堀の内側への改修に伴って、建物自体も内側へスライドしたと考えられる。内堀の移動と内堀に付随する土星の整備も相俟って、やはり平面空間の確保が難しくなったことから建て替えとなった可能性を指摘したい。総柱建物の掘立柱建物2から同一機能を有する掘立柱建物3へと変遷したと考える。なお、掘立柱建物1とこれら2棟は併設されていた可能性もある。これら掘立柱建物と内区にある井戸1の存在から日常的な居住が可能であることも容易に想像できる。

堅穴建物は残存状況の良好な堅穴建物1から12世紀の陶磁器類が出土しており、居館内区の施設であったと考えられる。その他の堅穴建物も工房や倉庫など何らかの機能を有して存在したに違いない。

(5) 外区1

外区1は内堀の外側で、なおかつ内区寄りの区域である。区画溝1と区画溝2によって区切

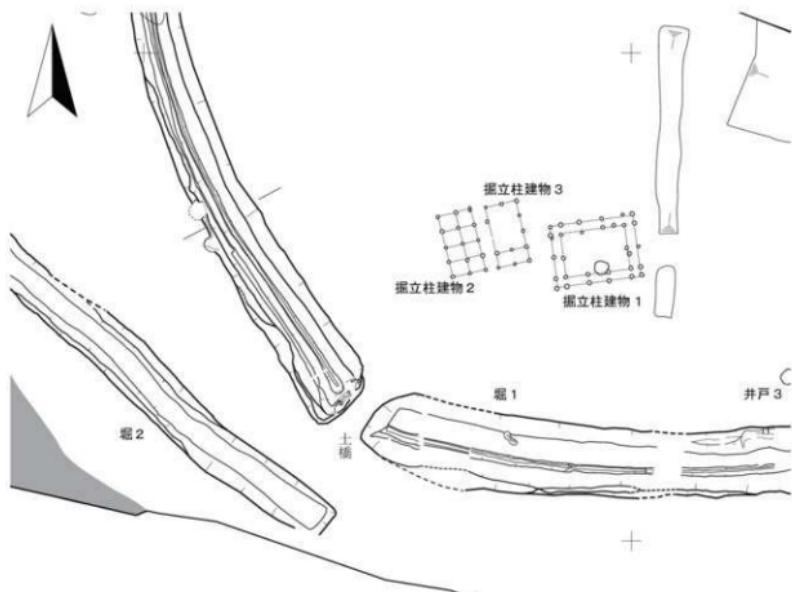


第3図 居館の堀配置および内区平面

られた範囲を一区画であると想定した。いずれの区画溝も出土遺物は少ないが、12世紀の陶磁器片が出土している。これらは矩形あるいは直線的である。区画溝2は調査区外方向へ南延しており、その先で屈曲し、区画溝1の方向へ延びる可能性もある。

この外区1には柱穴は無数に存在したが、中・近世のものも多く含まれており、12世紀代の建物を見出すことはできなかった。また、区画溝2の位置する東側の区域にはこれまた無数の杭の痕跡がみられたが、やはり時期が不明であるとの規則性を見出すことができなかった。何らかの施設や建物が存在した可能性はあるが、実体は不明である。

外区1でもっとも特徴的な遺構は円筒形の土坑群である。広大な調査区内において、他の区域では存在せず、この外区1東側の一角にのみ集中分布する。先述した通り、拙論でその機能を推測し、これらが雑穀の貯蔵穴である可能性を考えた(福島2022a)。調査時は、トイレ状遺構も視野に入れたが、寄生虫等が検出されず、ごく少量の雑穀(炭化アワ・ヒエ・キビ)が検出された。拙論ではアワが馬



第7図 堀内区3棟の掘立柱建物

匹生産にとって重要な飼料作物である可能性を見出し、この居館の一角に集中するの理由について、馬事関連の空間であったことを考えた。当然、雑穀耕作地があった可能性もあるが、畝間は確認されず、さらにな内区により近い区域であることから耕作地である可能性は低いと考えた。

ここでは1基のみ井戸があることも注目に値する。当然馬の飲料水は必要であると考えられ、機能的に合致すると考えた。

その他の遺構では、溝2の機能が不明である。溝の流末は北側の低湿地に接続することから排水溝の可能性があり、想像の域を出ないが馬のし尿処理用の溝であったかもしれない。

(6) 外区2

この区域は、居館東端部、区画溝2より東側の区域である。居館においては、もっとも低い地点に相当する。東側は低湿地になっており、現段階ではここで何らかの機能を見出すのは難しい。

区域内には、竪穴建物1棟、祭祀溝1条、井戸1基などの遺構がみられる。掘立柱建物も存在した可能性もあるが、この区域の柱穴は中世後半・近世のものが大多数を占める。

竪穴建物4は南半が本調査以前の試掘トレンチによって掘削されており、全容不明である。この箇所は祭祀溝も横切っている地点に当たるため、両遺構が切り合って存在している可能性もあったが、今となってはそれを検証できない。この竪穴建物4は方形基調で、床面には周溝が巡っており、板壁だった可能性が考えられる。時期の判明するような出土遺物には恵まれなかったが、張り出しを有する中世の竪穴建物に切られており、これよりは古い時期の建物であること、古代前半の遺構が分布しないエリアに位置すること、内区にある竪穴建物1に形態が似ることから12世紀の建物ではないかと



第8図 居館外区1平面

推定した。建物床面の西端と東端には、それぞれ小土坑がみられた。建物の柱穴である可能性も想定したが、埋土中には大量の炭化物や鍛冶滓が詰まっており、これらの廃棄ビットであると特定した。残存する床面で炉は存在しなかったが、建物は鍛冶工房の可能性が高い。炉はトレンチが掘削された箇所にあった可能性が高く、試掘回答にも焼土の記載があった。

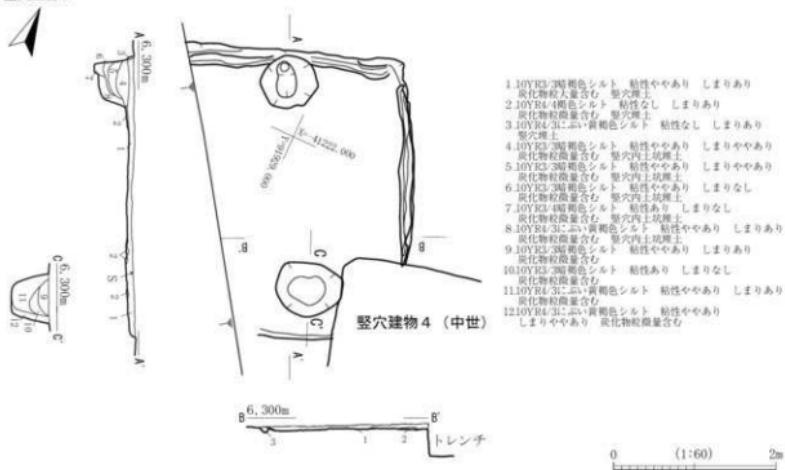
次に、祭祀溝はこの遺跡を象徴する遺構である。溝の底面では炭化物層が顕著で、この炭化物層内に多くの鉄製小札が出土した。小札が多く出土した付近の底面には溝底面に2条の石列があり、石のない遺跡内で特殊な意図を持って並べられたようである。祭祀溝としたのは、故意に刻みがある小札、故意に折り曲げられた小札、高台の打ち欠かれた白磁碗など損壊行為が顕著であったためである。小札以外にもこの溝から多くの鉄製品が出土した。また、この溝に接続する井戸1でも、やはり多くの鉄製品が出土した。出土した12世紀の鉄製品の大半がこの両遺構出土である。祭祀溝より出土した小札はその特徴から12世紀前半（津野 2011）、2点の白磁碗のうち1点がやはり12世紀前半代のものであった。もう1点の白磁碗は12世紀後半であったことから、祭祀行為は12世紀後半頃、やや古い器物を集め、その祭祀行為がおこなわれたと推測される。小札はアッドストック品が祭祀に用いられたと想定したが、その他の多種多様な鉄製品もこの付近で製作・修繕されていた、あるいは保管されていた可能性が高い。さらに、これらの遺構内あるいはこの周辺で出土した国産陶器の中には金属による擦痕が明瞭なものも含まれており、これら陶片が砥石の代用として用いられたことが判明した。

調査から推論を交えて考察した結果、この外区2では12世紀後半頃に損壊儀礼の祭祀がおこなわれ、これには祭祀の時期に近い器物のみではなく、古い器物も使われたとみられる。竪穴建物4が鍛冶工房であるならば、この区域は鉄製品を対象とした工房エリアであり、その後何らかの理由で器物損壊



第9図 居館外区2平面

堅穴建物 5



第10図 堅穴建物 5

による祭祀がおこなわれたとみるべきである。

(7) 外区3

居館の西で、経塚と考えられる高まりがこの西の尾根上に存在することを考えると、居館と無関係

な区域ではないと考えられる。おそらく近世以降は現在のように南北の道路が通じていたと想定される。その前身となる道があったのかもしれない。土橋のある居館出入り口の位置とも調和的である。

3. 機能分化と構造変化

居館は区城が分割でき、なおかつ、それぞれ機能がそれぞれ異なっていることを指摘した。このことから単なる有力者の居住空間としての居館にとどまらず、実に多機能であったことが理解される。

ここでは、各構造の機能を明確にし、さらにその構造変化についての検討を加えることによって居館の消長の中における機能と構造の変遷について考えてみたい。

（1）堀および内区

堀および内堀内区については、居館の中心域であることを述べた。そして、内区にある建物および井戸の存在から館主やその他近習の日常生活がおこなわれたものと考えられる。すなわち、内区は居館の核心的な機能を有することを示唆している。主となる建物が確認されていないため、その政治的な役割については不明な部分が多いものの、堀で開まれたこの空間が政治的機能を有していたことも想像可能である。この政治的・日常的な空間を囲む堀は、やはり防御性を考慮して設計・設置されたことは明らかである。このことは堀内区が外部勢力によって侵攻・攻略される可能性を示唆している。堀と土塁の根本的な防御機能を物語っており、堀を有する居館の意義を見出すものである。

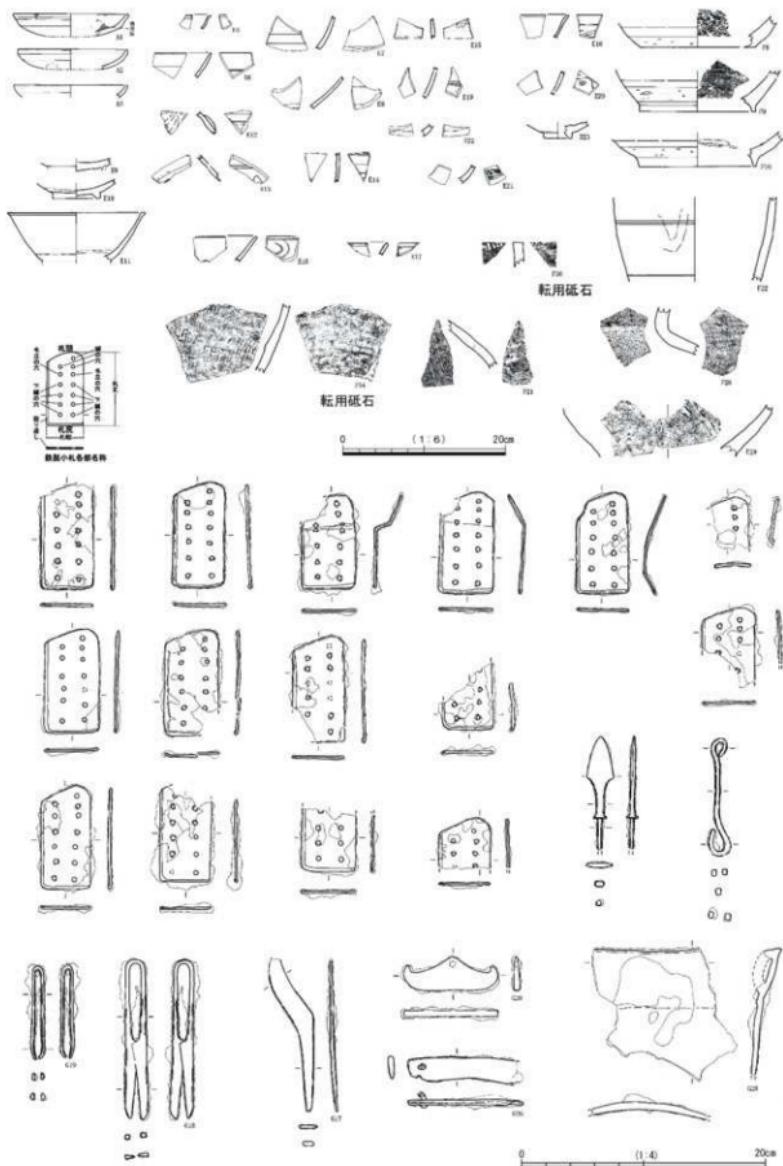
次に、居館の機能中、外堀が新設され土塁が整備される。居館西側が二重の堀を備えるようになる。この大規模な土木工事は、内区の平面的なスペースを制約し、掘立柱建物の建て替えも余儀なくされる。すなわち、居館に何らかの緊張感が走り、防御性を高める必要性に迫られたことが想像できる。土橋の盛土内から割花文の青磁碗片が1点出土しており、二重堀形態となる時期を前後するタイミングで混入した遺物である。翻って、堀埋土の遺物の中に12世紀前半頃の水沼産陶器片が含まれている（註2）ことを考慮すると、居館は12世紀前半に成立していた可能性がある。その後、12世紀後半頃、二重堀へと構造変化した可能性が考えられる。同時に内区は居館成立当初以降も変わらず核心的な機能を有していたことも想定される。

（2）外区1

区画溝で区画されたこの区域は内区に近い。馬事関連施設を想定した区域である。ここでは遺構・遺物からその構造変化を捉えることができなかったため、現段階では終始单一の機能を有したものと解釈している。これは密集して検出された貯蔵穴の一部に切り合いを有する事例があることから、ある程度の長期間、飼料用雜穀の貯蔵が繰り返されていたと推測される。馬の頭数までは想像もできないが、必要に応じて居館で飼養管理された馬がここに集められていた可能性が考えられる。雜穀を多く与えられているのであれば、駄馬ではなく上馬の可能性が高い。軍事目的があるいは出荷目的かは不明だが、居館の性格の一つを示すものと考えられる。

（3）外区2

居館最東端に位置するこの区域は、鍛冶工房を備えている鉄製品の製作・加工・修繕を担ったエリアであることを述べた。堅穴建物は鍛冶溝の廃棄坑の存在から鍛冶作業がおこなわれた工房であると想定したが、周辺域の鉄製品の出土量はその他の区域の比ではない程、質・量ともに豊富である。居館出土鉄製品の大半がこの外区2出土である。また、このエリアで出土した陶器片の一部に砥石として転用されたものが存在するため、陶器片による鉄製品の研磨がおこなわれた可能性が高い。鉄製品は、後述する祭祀溝とこれに連結する井戸から多く出土した。出土鉄製品は武器（鉄鎌）・武具（鉄製小札）・馬具（銜）・工具（弓削刀子）等多彩なものであり、何か一種に特化し集中的に製作してい



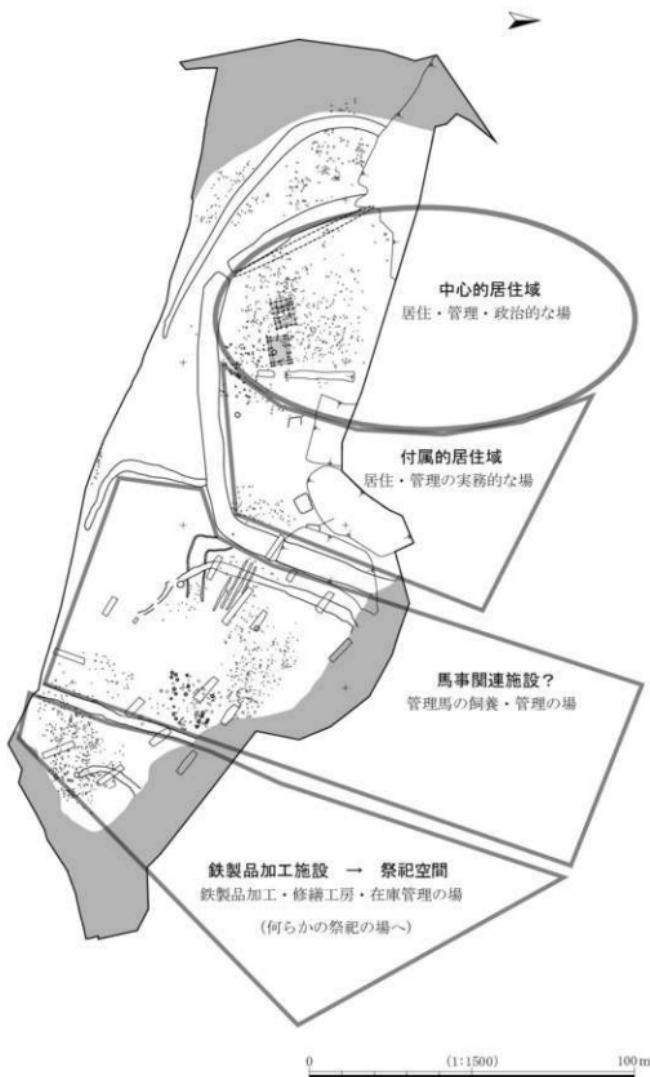
第11図 居館出土主要遺物

た様子は看取されない。したがって、製品の製作というよりも再加工や修繕、それに伴う保管といった役割を果したものと推測される。このことは、出土した鉄製小札の観察からも補完される。出土した鉄製小札は、編年を考慮すれば11世紀後半から12世紀前半にかけてのものである（津野 2011）。居館の中心となる時期は、12世紀後半であるためそれよりもやや古い段階の器物である。出土した鉄製小札には、微調整の矯めや漆の塗布が認められないことから、大鎧として組まれた履歴を持たないと報告した（岩埋文 2020）。このことは、この工房区域内でデッドストックされていたリペアパーツの一つであり、余剰の鉄製小札が長らく保管されていた可能性が考えられる。同時に、鉄製小札を減して大鎧を組み上げる甲冑師のような専門的な職人の存在も示唆している。さらに、出土した弓削刀子が弓師によって弓製作に用いられた工具であると想定した拙論（福島 2021）とも符合し、武器・武具製作の特殊な技能を有する職人が周辺も含め近住していたことを示唆している。その時期は、鉄製小札と共に白磁碗のうち、1点は12世紀前半のものがあり、鉄製品以外にも時期的に近い遺物の存在は、12世紀前半頃すでに工房機能や保管機能が始動していた可能性を示している。居館の消長を考えるうえでも重要である。

一方、この区域では最終的に祭祀溝と井戸のセットが機能する段階に至る。先述した鉄製小札および白磁碗は祭祀溝での損壊儀礼によって遭棄されるわけだが、損壊儀礼を伴う祭祀行為はもう1点の白磁碗の時期である12世紀後半をもって完結していると考えるのが妥当である。12世紀前半には操業を開始していた工房域も12世紀後半にその姿を祭祀の場へと変化させるのである。この構造変化が何を意味するのか計り知れないが、想像を含めて述べると、12世紀後半頃に工房の機能停止があり、これまで保持していた鉄製品の放棄がなされた可能性がある。損壊儀礼に込められた願いや精神性の本質は明確ではないが、12世紀前半から保持していた武具、溝の掘削による工房建物の損壊は、やはりこの区域での鉄製品に関する作業の終焉とその区切りを示しているように思える。

さて、この外区2の構造・機能変化は、現段階においては居館中心域の構造変化と連動するかどうかは不明である。しかし、居館中心域での防御機能強化と東側工房域機能停止とは目的という点では相反する事象である。外敵からの脅威を想定した緊張感が走れば、居館内での鉄製品、特に武器・武具の加工や整備も急ピッチで促進されると想定されるが、居館内での鉄製品の整備や保管を放棄する事態になっている。この矛盾の原因を探ると、いくつかの仮説が想定される。その一つは、この東側工房域の機能停止と西側防御機能強化に時間的なズレがあった可能性、もう一つには、東側工房機能を別の場所へ移転・拡充させた可能性などが考えられる。前者の場合は、西側防御機能強化まで東側工房域は機能していた。しかし、その後居館終焉頃を契機として、工房域も機能停止し、その機能停止に伴って祭祀がおこなわれた、と想定することができる。後者に関しては、周辺域での工房の拡充は現段階で確認できない。周辺域を含めた発掘調査成果では、西側に隣接する田鎖遺跡・田鎖館跡では同時期の鉄滓など工房に関連する遺物がみられない。一方、長沢川を挟んで東に位置する松山館跡では、12世紀を前後する時期の堅穴建物（工房か？）が1棟認められるが、居館と併存していたとしても、その機能の拡充を示す程のものではない。したがって、現段階では居館の終焉そのものと溝での損壊儀礼による祭祀行為が関連している可能性を考えたい。

現状では推論にとどまるが、居館はその軍事的緊張感から、おもに西側の防御機能強化が図られ、その後終焉を迎える。その終焉に伴って東端の工房域解体・整理、そしてその終焉に対する器物損壊儀礼の祭祀が執行されたのではないだろうか。このような一連の象徴的な動勢が12世紀後半頃にこの居館で起こったものと推測する。



第12図 居館の構造・機能とその変遷

4. 居館の性格とその背景

(1) 居館の成立背景

構造や機能からこの居館の性格やその役割が見え隠れする。報告書でも記したとおり、居館の立地から宮古湾を通じて太平洋を利用する水運の拠点として成立した可能性が考えられる。12世紀の宮古湾は、平泉藤原氏の太平洋ルートを利用した交易の最重要寄港地の一つであり、なおかつ、これを管理・監督するための在住する人物および施設が必要となった結果、この宮古湾から閉伊川を週り、やや奥まった場所に位置する居館の成立を想定した。しかし、それ以外にも重要な要因を付け加えることができる。それは近年の検討によって、12世紀以前から宮古湾周辺では、各種産業が開花している様子がみられる点である（福島 2022a・2022b）。特に、塩と雑穀生産は馬匹生産を支える重要な産業であったことを指摘した。5世紀に列島で始まった馬匹生産は、始発地点である河内平野から東山道を主要なルートとして東進し、岩手県域でも遅くとも8世紀には各地で始まっていたと考えられる。その後、10世紀には宮古湾を中心とする岩手県沿岸地域、岩手県内陸北部、青森県東部地域などで馬匹生産が盛んになることを想定した。また、それ以前からすでに始まっている豊富な砂鉄を始発原料とした鉄生産も同様である。これら産業と居館の成立にも因果関係があると考えられる。

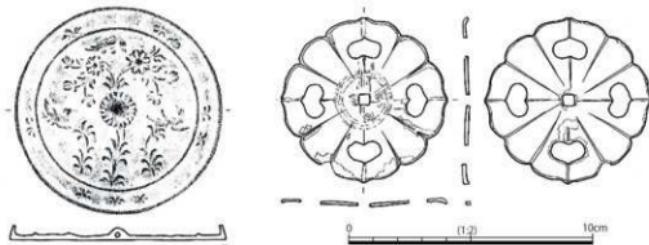
平泉と居館の関係は不明確であるが、現段階では平泉と無関係であることを論ずる方に無理がある。第一に、平泉藤原氏が太平洋の海上交通を掌握しているからこそ、北方交易品が平泉の経済基盤となっているはずである。この掌握手法は必ずしも明確にはなっていないが、少なくとも地理的にみた重要寄港地である宮古湾の寄港や交通の妨げになっては、北方交易に多大な損害が出ることは必至である。日本海ルートも存在するが、平泉に直結する北上川は太平洋にその河口を有している。海上から河川を利用する水運の連続性を重視すれば、太平洋ルートが理にかなうのではないだろうか（註3）。常滑陶器を有する北海道厚真町の宇隆1遺跡は、その行く先を示しているように思える。

この太平洋の海上交通は、宮古湾周辺地域で得られた生産物を平泉へ供給することもできる。12世紀段階での宮古湾周辺の馬匹生産を直接結びつける史料は存在しないが、田鎮の居館で管理されていた可能性がある馬には、当然軍馬も含まれていると想像される。軍馬、鉄製の武器・武具、これら軍事に関わる生産活動は、いわば軍需産業であり、これを在地社会のみで制御することが可能か、という疑問がある。武家社会において軍需産業の掌握を、軽視することはその体制基盤そのものを危うくする。宮古湾を含め岩手県沿岸地域では11世紀の拠点は未発見であるが、12世紀前半代に成立したこの居館が平泉の経済・軍事等を補佐していたと考えられる。しかし、11世紀段階の安倍氏は、軽視していたわけではないだろうが、結果的にこのような各種産業を掌握しきれていないかった可能性も想定しておいた方がいいかもしれない（註4）。

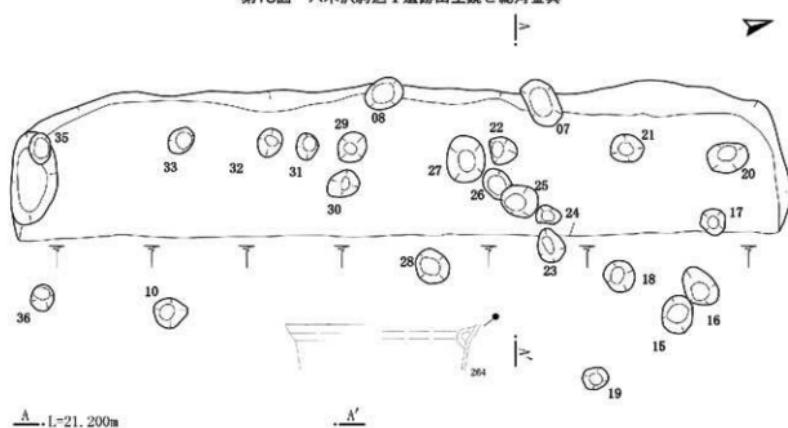
(2) 居館と地域社会

居館を取り巻く環境から在地の地域社会との関係性を探ることは重要である。しかし、現状では、岩手県沿岸地域において12世紀の遺構・遺物が限定的であり、これを知るに足る材料に乏しい。特に、重要基盤であったと想定した鉄生産関連遺跡は数多く存在するが、通常土器等の遺物を伴わないため時期を特定するに至らないことが多い。放射性炭素年代測定（AMS）を用いて、この時期問題を解決しようと試みられているが、その精度もまだ不安定であると言わざるを得ない。田鎮車堂前遺跡の測定でも多くの測定結果が考古学的な知見と乖離していた。歴史時代のみならず、弥生土器採取の炭化物でさえ的を射た値ではなかったと記憶している。本題に戻るが、このような状況でも田鎮地区の東に位置する松山地区や八木沢地区で、注目すべき遺物が出土している。

田鎮車堂前遺跡の居館から長沢川を挟んで東側に隣接する松山館跡では、前述したとおり、12世紀



第13図 八木沢駄込I遺跡出土鏡と緒角金具



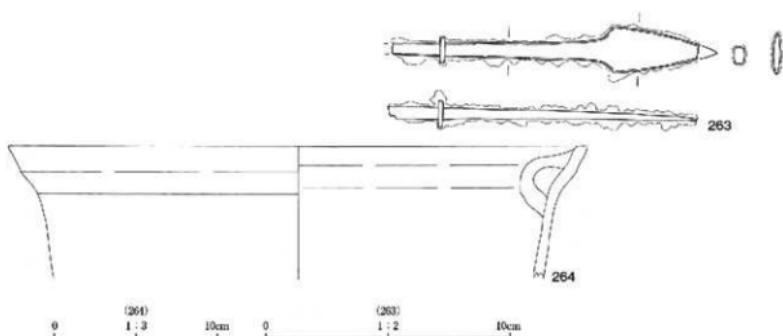
A, L=21.200m

A'



1 10W3/2 塗褐色砂質シルト 粘性質 しまり度 真砂土の細粒少量を含む。
2 10W3/4 にぶい黄褐色シルト 粘性や中強 しまり度 地山崩落土(真砂土細粒混じり)。

0 1 : 40 1m



第14図 松山館跡工房と出土鉄製品

代の工房と考えられる堅穴建物が鉄製品を伴って検出されている。尾根頂部よりやや下った斜面に立地する堅穴建物は床面の大半が残存していないが、煙道やカマドが認められないため何らかの工房と考えられる。遺跡内では鉄生産関連遺構や関連遺物も多く検出されており、鉄生産に関わる工房の可能性が高い。この工房出土鉄製品のうち、鉄鎌は平安時代のものであると推測される。内耳鉄鍋は下端の湯口は不明ながら、その形態から12世紀頃の所産である（註5）。この遺構以外にも堅穴建物は多くみられるが、12世紀の遺物を伴うものは、この工房のみである。鉄生産関連遺構の中には12世紀代のものも含まれている可能性があるが、現段階では不明である。12世紀の工房が長沢川東岸にあることから、田鎮車堂前遺跡の居館と何らかの関係が考えられる。松山館跡は日常生活の場ではないことは明らかであり、居館の基盤を支える生産域であり、対岸の田鎮車堂前遺跡の居館がこれを統括していたものとみられる。

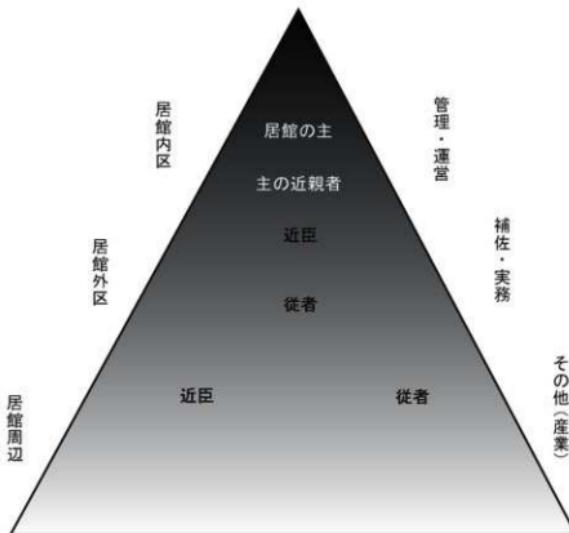
さらに東の八木沢地区では、八木沢駒込II遺跡の尾根から延びる斜面で12世紀の銅鏡1点と総角付鏡座金具1点が出土している。銅鏡は「秋草飛鳥文鏡」で12世紀の型式に相当する。鏡に付着した織維は漆が塗布された絹布であり、丁寧に布に包まれていたのかもしれない。総角付鏡座金具は鍍金されている。大鎧の背面中央を飾る金銅製金具であり、全国的にも出土事例は少ない。大鎧で用いられる部品であり、形態から12世紀中頃のものであるらしい。これも付着物があり、墨痕のある紙であることが判明している。これらは遺構に伴うものではないため、どのような経緯でこの場に所在したのか来歴等不明であるが、尾根頂部突端部で小規模な土坑が1基検出されており、本来これらが埋納された土坑である可能性が考えられる。出土した2点が鏡と武具であること、土坑は尾根頂部突端部に位置することから、想定される遺構は経塚で、これらが副納品の一部であったとするのが妥当であろう。総角付鏡座金具の紙の付着は、丁寧に単独で和紙に包まれていたか、経典が密着していた可能性も考えられる。いずれにせよ、これら2点は祭祀的な意味合いを持ってこの場に持ち込まれたものであることは間違いない。田鎮車堂前遺跡に所在する経塚との関係性もあるかもしれない。

田鎮車堂前遺跡の南東約3kmに位置する八木沢野良I遺跡は、八木沢駒込II遺跡の南に隣接する。発掘調査では12世紀の白磁碗片が出土している。遺構に伴わない遺物であるが、遺跡内では工房と考えられる堅穴建物が検出されており、関連性が注目される。この遺跡も鉄生産の場であったとされており、堅穴建物はこれに関わる工房の可能性が考えられる。なお、八木沢駒込II遺跡の尾根から下方に当たる地点で白磁碗が出土しているため、八木沢駒込II遺跡でみられた鏡などに伴う遺物であった可能性もある。

（3）居館の基盤

これまでみたとおり、田鎮車堂前遺跡の堀を有する居館は、関連すると思われる鉄生産の場が周辺に認められる。特に、松山地区・八木沢地区は出土遺物等から判断すれば、居館とかなり密接な関係にあったと考えられる。鉄生産という地域の産業が周辺に展開しており、当然これらを統括していたのが居館であったと想定されよう。また、八木沢駒込II遺跡でみられたように、祭祀的な遺物の存在はその宗教観や精神性においても居館と共有されていたと想像される。特に、総角付鏡座金具は大鎧の部品であり、居館の祭祀で用いられた大鎧の鉄製小札と相通ずる。共時性のみならず、祭祀的な意味合いを武具に見出すという共通の宗教観に注目すべきである。これら周辺地域には、10世紀後半以降、雜穀や塩生産の痕跡もみられるため、馬匹生産も周辺域でおこなわれていたと推測される。

地域の政治・経済・産業・物流・宗教等を統括・管理するシンボリックな拠点こそが、田鎮車堂前遺跡の居館が担った最大の役割であった。このように複合的な事柄を縦走するように統合・管理するためには政治力が必要と思われ、その執行を居館の主たる人物がおこなっていたと考えられる。



第13図 居館の階層

また、周辺域ではこの居館終焉以降も鉄生産・馬匹生産が継続している可能性が高く、特に馬匹生産は中世文献史料の記述にみられるように本邦随一の生産地として認知されるに至る。これら産業の基盤整備と流通の確立に導いた功績を、この居館という地域のシンボルに当てはめることも可能であると考える。

まとめ

本稿では、田鎮車堂前遺跡の居館について論じた。未解明な部分が多く推論を重ねたが、居館の構造とその機能について考察をいくらか前進させたつもりである。本来であれば、発掘調査報告書に盛り込むべき内容だったかもしれないが、その時点では詳細な分析をおこなう時間も、それを記載する紙幅もなく、結局本稿に至った。

居館の構造分析によって、広義の居館内部が区域分けできることを提示した。各区域はそれぞれ、機能が異なっており、堀内区を中心とする居館は様々な機能を有する複合的な施設であったことを述べた。堀内区は居館主、その近親者に加えて近臣等の日常的な生活・居住空間であるとともに、政治的な核心部分でもあった。堀の外には馬事関連施設や鉄製品の加工・修繕などの工房域がそれぞれ備わっていたと想定した。居館は12世紀後半に何らかの軍事的脅威に晒され、防御機能が高められ、その後12世紀のうちに終焉を迎えたとみられる。居館の終焉時あるいはその後に工房域の解体・破棄がなされ、これらの有していた器物を損壊して祭祀がおこなわれたと想定した。

また、周辺域では様々な産業が根付いており、これらを統括・管理する役割を居館が担っていたと思われる。特に多くの軍事物資を扱うこの地域が、平泉と無関係であったとは到底考えられない。平

泉の権力基盤の一部を委譲されているため、それなりの人物の支配を考えるのが妥当であろう。

さて、平泉藤原氏は文治五（1189）年、鎌倉の軍勢によって蹂躪され滅亡する。居館が平泉と密接な関係にあったとすれば、宮古湾周辺においても軍事的な緊張感が及んでいたかもしれない。12世紀後半の田鎮車堂前遺跡における居館の防御機能向上は西側に向けられており、湾岸からではなく内陸方面から外敵侵攻を想定していた可能性が考えられる。これが文治五年の前後なのかどうかは断じ得ないが、非常に近い時期であるとみられ、居館の終焉も帆を一にしている可能性がある。これらの論証は今後の課題でもある。

謝辞

本稿を執筆するにあたり以下のみなさまから有益なご教示をいただきました。お名前を記して御礼申し上げます（50音順・敬称略）。入間田宣夫・植月 学・菅野寛宜・齊藤利男・趙 哲済・羽柴直人・八重澤忠郎・八木光則

註

- (1)入間田宣夫先生のご教示による。
- (2)近年、八重澤忠郎氏はこれら陶器片が水沼産以外の可能性もあることを指摘しているが、現時点では確定していない。そのため本稿では報告書発刊時の情報を援用している。
- (3)田鎮車堂前遺跡と太平洋航路との関係性については、「奥州と都との物資往来は、これまで日本海ルートを利用したとする見方が有力だったが、（～中略～）太平洋ルートにも目を向ける必要があろう」と、近江俊秀氏も指摘する（近江 2020）。
- (4)史実か否かは筆者には判断できないが、文献史料においては1170年の「延久二年北奥合戦」に際し、陸奥守源頼俊が清原氏とともに「閉伊七村山徒」の征討をおこなったとされており（入間田 1997）、閉伊地方の動向について大変示唆に富む。
- (5)内耳鉄鍋の年代観については羽柴直人氏のご教示による。

引用および参考文献

- 岩手県教育委員会 1986 「田鎮館（三合並館）」『岩手県文化財調査報告書82集 岩手の城館跡』 p.244
- （財）岩手文 2008 「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第511集 賽の神II遺跡・賽の神遺跡・下大谷地I遺跡・八木沢野來遺跡発掘調査報告書」
- （公財）岩文振 2011 「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第575集 八木沢駿込II遺跡発掘調査報告書」
- （公財）岩文振 2014 「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第625集 松山駒跡発掘調査報告書」
- （公財）岩文振 2020 「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第718集 田鎮遺跡・田鎮館跡・田鎮車堂前遺跡発掘調査報告書」
- 入間田宣夫 1997 「延久二年北奥合戦と諸郡の建置」『東北アジア研究』1号 東北大学東北アジア研究センター
- 入間田宣夫 2005 「Ⅲ 天下一の馬産地として」『北日本中世社会史論』吉川弘文館
- 入間田宣夫編 2008 『牧の考古学』 高志書院
- 植月 学はか 2020 「青森県における古代の馬利用－林ノ前遺跡出土馬の動物考古学・同位体化学的研究－」『研究紀要第25号』 青森県埋蔵文化財調査センター
- 植月 学 2021 「動物考古学からみた馬匹生産と馬の利用」『馬と古代社会』 八木書店
- 近江俊秀 2020 「太平洋から見た古代日本史」『海から読み解く古代日本史』 朝日新聞出版
- 趙哲済・福島正和 2021 「宮古市田鎮車堂前遺跡の12世紀の居館を巡る堀の構築と埋没の過程－遺構埋土の岩相層序と堆積状況の観察に基づいて－」『紀要』第40号 （公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 津野仁 2011 「小札甲（大鉢）・背（兜）の編年」『日本古代の武器・武具と軍手』吉川弘文館
- 羽柴直人 2013 「陸前高田市矢作町出土の内耳鉄鍋」『岩手県立博物館研究報告』第30号
- 福島正和 2021 「弓削子孝」『紀要』第40号 （公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 福島正和 2022a 「東北地方北部における平安時代の雜穀利用に関する考古学的研究」『紀要』第41号 （公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 福島正和 2022b 「平安時代における三陸沿岸地域の製塙と馬匹生産」『岩手考古学』第33号 岩手考古学会
- 八重澤忠郎 2012 「考古学からみた北の中世の黎明」『北から生まれた中世日本』 高志書院
- 八重澤忠郎 2019 「平泉の考古学」 高志書院
- 山崎 健はか 2016 「藤原宮跡出土馬の研究 奈良文化財研究所報告書17」 独立行政法人奈良文化財研究所

岩手県における磨製石斧の製作工程について

村木 敏

筆者はかつて岩手県沿岸北部地域に所在する縄文時代の遺跡から出土した磨製石斧の整理を通じて、従来と異なる簡略化された製作工程が存在することを確認した（（公財）岩手県文化振興事業団2019・2021b）。拙稿（2021）では、簡略化された製作工程の復元を試み、両工程を対比することでその一端を明らかにした。本稿ではさらに岩手県全域にその範囲を広げ、縄文期における磨製石斧の製作工程の実態を明らかにしていく。

1.はじめに

筆者は岩手県沿岸北部地域に所在する縄文時代の遺跡の整理を通じて、磨製石斧製作において簡略化された工程が存在することを確認した（（公財）岩手県文化振興事業団2019・2021b）。従来から提示されている製作工程（阿部1987・2001、鈴木1993、須原2013）とは異なるものであり、拙稿（2021）では両工程を対比することにより簡略化された工程の復元を試みた。その結果、製作工程は、石材によって選択する構造が成立しており、製作者の意図が反映される柔軟性を有するものと評価された。また、それは縄文時代早期から後期にかけて通時的に存在していたとの結論に至っている。このように、縄文時代における岩手県では、磨製石斧の製作工程が複数存在していることが明らかとなった。本稿では岩手県全域に範囲を広げ、縄文期の磨製石斧製作工程の実態を把握していきたい。

2. 製作工程の区分と対比

（1）製作工程の区分

従来から把握されている須原（2013）が提示した製作工程を工程A、筆者（2021）が提示した製作工程を工程B1・2と区分し、記述していく。なお、これらとは別に擦切技法（高橋2017）も存在しているが、資料数の少なさから本稿では言及せず、出土の有無とする確認のみに留めている。

製作工程は、「剥離・敲打・研磨」の各整形作業によって成立していることから、ここでは3種の技術区分により各製作工程を把握していく。以下、製作工程については、完成品以外の各整形段階をみていく。以前、筆者（2021）は須原の提示した成果（2013）と比較するために同様の段階区分を設定したが、今回の区分では剥離・敲打整形段階を敲打整形段階（前半）に統合した形となる。各段階における該当資料については第1図に示しておく。資料の大半は未製品として捉えられていることが多いが、形状は完成品と大きく乖離していることと、概ね欠損していることから失敗品として捉えている（阿部2000）。

（2）製作工程の対比

製作工程A

【剥離整形】 両面に対して剥離を施し、左右対称となるように整形される。また、これらの中には、自然面を片面もしくは両面の器体中央に残すものも含まれる。

【敲打整形】 剥離整形を概ね完了させた個体に対して敲打を施している。前半は側面もしくは表裏側から整形されている。後半は全面に展開していく。

【研磨整形】 全面が敲打痕に覆われている個体に対して研磨を施している。ただし、稀に敲打整形の

工程が未完了の個体に対して研磨整形を施す例が確認されている。

【石材の捉え方】捉え方は石材の厚薄（①・②）に関わらず、中央である芯の部分を利用している。つまり、これは規格的な整形を意図していることが特徴である。

【製作過程】段階ごとに作業を完了させた後に、次段階へと移行している。稀に、未完了の個体を次段階へと移行する例も認められるが、自然面を極力除去しようと試みた痕跡が認められる。基本的には剥離整形により左右対称に整えた後、次段階へと移行させている。本製作工程は製作者による個人的判断（見立て）を介在することが少なく、一律的な過程にあることが窺える。

製作工程B1

【剥離整形】片面のみに剥離を施し、表裏面は自然面と剥離面で構成される。その結果、側面観は左右非対称に整形される。

【敲打整形】片面・側面剥離に整形された個体に対して敲打を施している。前半は、片面・側面の剥離面側を中心整形されている。後半は自然面側へと移行し、全面に展開していく。

【研磨整形】全面が敲打痕に覆われている個体に対して研磨を施している。ただし、稀に敲打整形の工程が未完了の個体に対して研磨整形を施す例が確認されている。

【石材の捉え方】捉え方は磨製石斧の片面に対して石材形状をそのまま利用している。つまり、これは完成形状を予め想定したうえで、素材選択が行われていることが特徴である。

【製作過程】全ての作業を完了させずとも次段階へと移行していることが捉えられる。これについては、自然面を片面に残したまま敲打整形を行うこと、剥離や自然面を残したものに対しても研磨整形を行うことが該当する。基本的に、側面観は剥離整形時に形成された左右非対称のまま、次段階へと移行している。特筆すべきは、剥離整形を極力施さず自然面を大きく残しても敲打整形へと移行している点であり、その行為が剥離・敲打整形時の作業軽減を意図していることがある。本製作工程は製作者による個人的判断（見立て）が反映されているものとみられ、柔軟な過程にあることが窺える。

この他には、剥離整形段階に類似した石器である礫搔器（力持型スクレイパー）を伴出する事例が多く認められる。これについては拙稿で述べたように、同工程の技術体系に組み込まれていたものと思われる。ただし、同器種については刃部位置により区分できることも確認している。

製作工程B2

【剥離整形】側面と刃部側にのみ剥離を施し、両面に自然面を残す。

【敲打整形】側面剥離に整形された個体に対して敲打を施している。該当資料は少なく判然としない。

【研磨整形】全面が敲打痕に覆われている個体に対して研磨を施している。ただし、稀に敲打整形が未完了の個体に対して研磨整形を施す例が確認されている。

【石材の捉え方】捉え方は磨製石斧の両面に対して石材形状をそのまま利用している。特徴は工程B1と類似するものの、整形度合いの少なさから、その形状によってさらに制限されていることである。

【製作過程】製作工程B1と同様、全ての作業を完了させずとも次段階へと移行していることが捉えられる。本製作工程は製作者による個人的判断（見立て）が重視されており、製作工程B1よりさらに簡略化した柔軟な過程にあることが窺える。

第1表 製作工程の比較

	製作工程 A	製作工程 B1	製作工程 B2
剥離整形	両面剥離 左右対称に整形	片面剥離：片面に自然面を残す 左右非対称に整形	側面と刃部剥離：両面に自然面を残す 概ね左右対称
敲打整形-前	側面か表裏面から整形	片面・側面剥離から整形	側面から整形
敲打整形-後	全面に展開	全面に展開	全面に展開
研磨整形	全面に覆われた敲打に 対して整形	全面に覆われた敲打に対して整 形、一部敲打が完了しない個体 にも研磨整形	全面に覆われた敲打に対して整形 一部敲打が完了しない個体にも研 磨整形
捉え方	原石の中央	原石を片側に寄せる	原石の中央
過程	段階ごとに完了させた のち、次段階へ 個人的な判断が少ない	全ての作業を完了させずとも次 段階へ 個人的な見立てが反映	全ての作業を完了せずとも次段階へ 個人的な見立てが重視

(3) 小結

上記のように各製作工程をまとめてみたが、製作工程Aと製作工程B1・2との間には同異点が捉えられる（第1表）。

共通点：敲打整形段階は剥離面側から作業が進行し、最終的に全面に施される。そして、それらに對して研磨整形が施される。

相違点：剥離整形段階における完成形状である。それに伴い、敲打整形段階の前半において整形過程に差が生じている。さらに、石材の捉え方（第2図）と製作に対する個人的判断が介在する度合いにも差異が認められる（註1）。

擦切技法：確認できる遺跡は早期の外屋敷XIX遺跡、前期から中期の力持遺跡と少なく、その様相については判然としない。

3. 分布と変遷

上記のように県内では敲打を伴う3種類の製作工程と擦切技法の存在を確認している。ここではそれらの分布と変遷を把握していく。

分布は第3図に示したように、製作工程Aが内陸、製作工程B1が沿岸北部地域を中心として広範囲に認められており、二極化にあることが窺える。ただし、この点について若干補足しておくと、製作工程B1は岩手県だけでなく青森県や宮城県の太平洋沿岸地域においても確認しており、広範囲に存在する一般的な様相にあるものと捉えられている（青森県教育委員会2011、石巻市教育委員会2018）。また、製作工程Aは從来どおり全国的に確認されているものである。

時間的変遷は第2表に示したように、各製作工程が通時的に認められる。しかしながら、製作工程Aは後期以降、製作工程B1は前期から後期の間で主に利用していることが捉えられる。この点から県内では現時点において後期に石斧製作の変換期を求められそうである。ただし、製作工程Aは内陸部で製作遺跡の確認例が少ないため判然としないが、早期以前には当然成立しているものと考えられる。このことから、各製作工程は概ね当初から併存していたものと想定される。

さらに、両者を合わせてみていくと、内陸部では後期以降に製作工程A、沿岸部では前期から後期まで製作工程B1が利用されていることが窺える。この製作工程に違いが生じた要因については、洋野町の遺跡の成果から検討していく。各遺跡では通時的に大量の石斧製作が行われていることを確認している。つまり、当該地域は、産出地へ直接採取ができる石材環境にあることを意味する。この要因としては、背後に形成される北上山地から複数河川への石材の流出が豊富であるため、供給量が安

定していること、採取地の一つである海岸までの距離が短い場所であることなど、石材の獲得が容易であったと想定される。このような良好な石材環境が、柔軟な製作工程B1を成立させた可能性がある。一方、製作工程Aは石材が限定されるため、集落遺跡外による製作が多いこと、また生産遺跡数も少ないことから判然としないが、石材環境と社会背景の変容が工程を選択させた要因となることが想定される（阿部2001）。

4.まとめ

以上、岩手県における磨製石斧の製作工程について概観した結果、敲打を伴う技法には、3種類の製作工程が内包されていることが明らかとなった。そして、それらは縄文時代早期から後期にかけて存続し、内陸部と沿岸部で二極化した分布を形成することが捉えられた。その要因としては石材の供給量が製作工程選択の背景に存在することを想定した。最後に県内の様相について特筆すべき点をまとめておく。

早期は遺跡数も少なく判然としないが、前期には製作工程A・B1・B2、擦切技法の全てが揃っている。内陸部ではその様相が不明であるが、沿岸北部では製作工程B1を主体とし、大量に磨製石斧の製作が行われている。後者における遺跡数及び石器の出土量を考えると、当該地域は一大生産地を形成していたものと思われる。この増加の要因は集落の増加に伴い木材需要の高まりを反映した結果と考えられる。そして、中期には県内において遺跡数が増加傾向にあるものの、製作工程については判然とせず不明な点が多い。さらに、後期は内陸と沿岸部地域で異なる製作工程が選択される。内陸部では専門的な体制が図られ、交換システム（阿部2001）の形成及び確立が示唆されている（須原2013）。それ以降、この体制が維持され、弥生時代にも継承されたものと考えられる。一方、沿岸部地域では、遺跡数が大幅に減少するため、晚期以降の様相については判然しない。

このような環境下において、県内の磨製石斧製作は縄文時代前期と後期に変換点が想定される。それは社会システムの変化などの要因が関係しているものと考えられるが、今後、その他の要素と複合的に検討して捉えていく必要がある。

本稿の執筆にあたり下記の方にお世話になりました。末筆ながら感謝申し上げます。

北村忠昭、須原 拓、村上 拓、村田 淳

註

1 これらが生じた要因の一つに、沿岸北部地域では石材の石質や環境などが想定されている（（公財）岩手県文化振興事業団201b）。それは、洋野町に所在する北ノ沢1遺跡では石器材料によって工程が使い分けられ、工程Aは主に層状に剥離しやすいホルンフェルス、工程B1は主に細粒花崗閃緑岩などを選択している事例である。

参考文献 （下記の岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第〇集は岩文埋報第〇集と略す）

- 青森県教育委員会 2011『道仏鹿跡遺跡 藤沢2遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第499集
阿部朝衛 1987『磨製石斧生産の様相』『史跡 寺地遺跡』353-372頁新潟県青海町
阿部朝衛 2000「先史時代人の失敗と練習-石錐と磨製石斧の分析から-」『考古学雑誌』第86巻第1号、1-26頁
阿部朝衛 2001「日本における磨製石斧と生産交換」『帝京史学』第16号116-130頁
石巻市教育委員会 2018『中沢遺跡』石巻市文化財調査報告書第14集
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1996『ゴッソー遺跡発掘調査報告書』岩文埋報第238集
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2000『長倉遺跡発掘調査報告書』岩文埋報第336集
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2004『小松I遺跡発掘調査報告書』岩文埋報第433集
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2006『金附遺跡発掘調査報告書』岩文埋報第482集
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2008『力持遺跡発掘調査報告書』岩文埋報第510集
(公財)岩手県文化振興事業団 2013『川目A遺跡発掘調査報告書』岩文埋報第589集

- (公財) 岩手県文化振興事業団 2015 「外屋敷 IX 遺跡発掘調査報告書」岩文理報第646集
 (公財) 岩手県文化振興事業団 2017 「西平内 I 遺跡発掘調査報告書」岩文理報第673集
 (公財) 岩手県文化振興事業団 2018 「北鹿株遺跡発掘調査報告書」岩文理報第686集
 (公財) 岩手県文化振興事業団 2019 「鹿賀浜 II 遺跡発掘調査報告書」岩文理報第702集
 (公財) 岩手県文化振興事業団 2020a 「田ノ端 II 遺跡発掘調査報告書」岩文理報第715集
 (公財) 岩手県文化振興事業団 2020b 「サンニヤⅢ 遺跡発掘調査報告書」岩文理報第714集
 (公財) 岩手県文化振興事業団 2021a 「間木戸遺跡発掘調査報告書」岩文理報第723集
 (公財) 岩手県文化振興事業団 2021b 「北ノ沢 I 遺跡発掘調査報告書」岩文理報第725集
 (公財) 岩手県文化振興事業団 2021c 「宿戸遺跡発掘調査報告書」岩文理報第726集
 (公財) 岩手県文化振興事業団 2022d 「鹿賀浜 I 遺跡発掘調査報告書」岩文理報第727集
 斎藤 岳 2012 「本州北東端の磨製石斧製作-三陸の石材環境への適応と石斧の製作の解明にむけて-」『研究紀要』第17号19-29頁青森県教育委員会
 鈴木道之助 1993 「磨製石斧概論」『千葉県史研究』創刊号21-39頁千葉県
 須原 拓 2013 「川目 A 遺跡出土の磨製石斧にみる石斧生産について」『紀要』XXXII 59-68頁 (公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
 高橋 哲 2017 「2・円筒土器文化圏における磨製石斧の考察-三内丸山遺跡と水上(2) 遺跡出土の磨製石斧の比較を通じて-」『特別史跡 三内丸山遺跡 年報』33-42頁20青森県教育委員会
 中島 誠 2002 「群馬県における縄文時代早期から中期初頭の打製斧形石器」『石斧の系譜-打製斧形石器の出現から終焉を追う-』57-61頁第10回岩宿フォーラム/シンポジウム予稿集
 宮古市教育委員会 1979 「宮古市大付遺跡発掘調査報告書」
 宮古市教育委員会 1989 「千葉遺跡-昭和62年度発掘調査報告書-」宮古市埋蔵文化財報告書16
 村木 敬 2019 「続括 石器」『鹿賀浜 II 遺跡発掘調査報告書』岩文理報第702集
 村木 敬 2021 「磨製石斧製作工程について」『紀要』第40号85-94頁 (公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

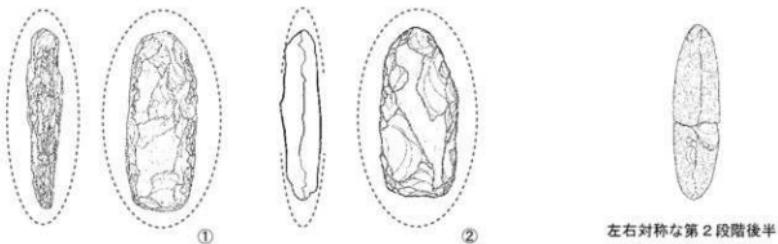
第2表 製作工程の変遷

縄文時代	内陸				沿岸			
	工程A	工程B1	工程B2	擦切技法	工程A	工程B1	工程B2	擦切技法
早期	■				■		■	
前期	■	■			■		■	■
中期	■			■	■	■		
後期	■				■		■	
晩期	■							

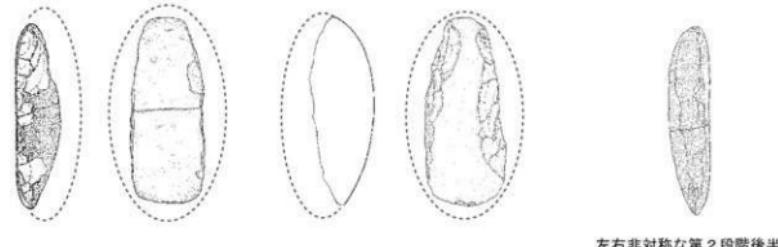
	工程A	工程B1	工程B2
剥離整形 段階			
敲打整形 段階			
研磨整形 段階			
			前半
			後半

第1図 製作工程図

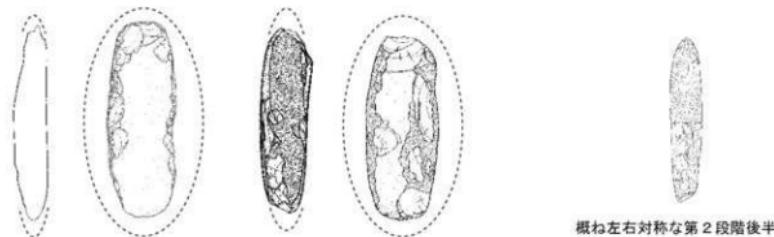
工程A



工程B1

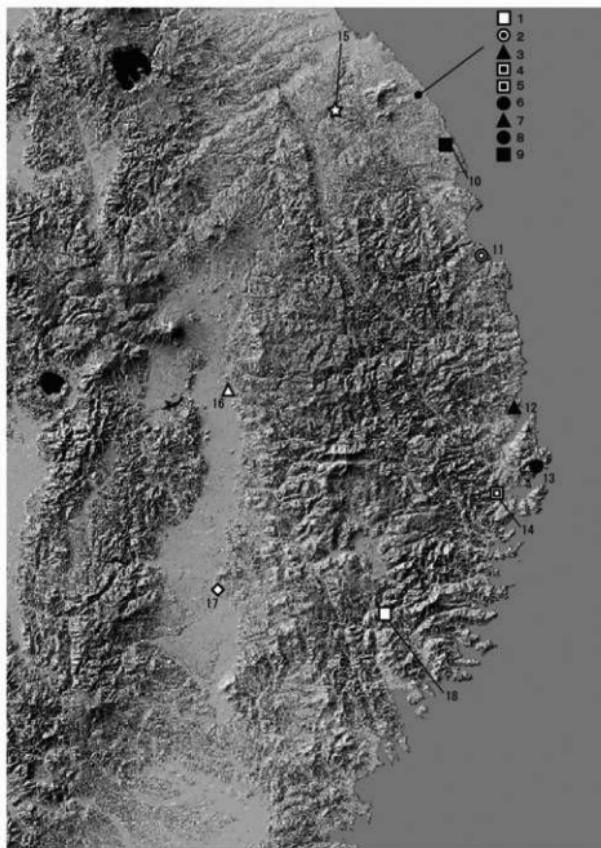


工程B2



○ 原石の推定範囲

第2図 石材の捉え方



- 1 田ノ端Ⅱ遺跡
- 2 北ノ沢Ⅰ遺跡
- 3 西平内Ⅰ遺跡
- 4 サンニヤⅢ遺跡
- 5 北鹿糠遺跡
- 6 ゴッソ一遺跡
- 7 鹿糠浜Ⅱ遺跡
- 8 鹿糠浜Ⅰ遺跡
- 9 宿戸遺跡
- 10 外屋敷Ⅸ遺跡
- 11 力持遺跡
- 12 大付遺跡
- 13 千鶴遺跡
- 14 間木戸遺跡
- 15 長倉Ⅰ遺跡
- 16 川目A遺跡
- 17 金附遺跡
- 18 小松Ⅰ遺跡

製作工程 A

製作工程 A・B1・B2

製作工程 B1・B2

□ 早期

■ 早期

● 前～中期

● 前期

■ 中期

◎ 前～中期

☆ 後期

□ 前～後期

△ 後～晚期

◆ 後期

▲ 後期

◇ 晩期～弥生

第3図 遺跡分布図

紫波町比爪館遺跡出土の鉄製馬具

村田 淳

紫波町比爪館遺跡の第12・16次調査で出土した鉄製馬具（轡）について、これまで個別の実測図が無かったことから実測図作成と外観写真撮影を行い、観察結果を掲載した。形態としては鏡板の平面形が逆ハート形となる「杏葉轡」であり、類例との比較から古代末～中世初頭（12世紀後葉～13世紀初頭）に製作されたものであることがわかった。

はじめに

今回報告する鉄製馬具は、紫波町南日詰に所在する比爪館遺跡の第12・16次調査で出土したものである（以下、本資料とする）。本資料は、かわらけや陶磁器類等と共に集合写真で比爪館遺跡の12世紀代の居館に伴う遺物として紹介されることが多いが（岩手県立博物館2014ほか）、平成14年に刊行された調査報告書には個別の実測図及び写真が掲載されていない（紫波町教委2002）。また、本資料は保存処理が実施されており保管状態は良好であったが、出土した状態のまま処理が行われた為、集合写真では連結方法をはじめとする細部の観察が難しい状況であった。しかし、令和3年度に岩手県立平泉世界遺産ガイダンスセンターの開館記念企画展「奥州藤原氏が観た東方淨瑠璃世界－赤沢七仏薬師－」において本資料を展示することとなり、担当者のご厚意で実見する機会を頂いた。また、その後資料の所蔵先である紫波町教育委員会からの許可を得て、実測図の作成及び外観写真撮影を行い、本報告で掲載する運びとなった。本稿では、比爪館遺跡における重要遺物の一つである本資料について、観察の結果と類例との比較について記載を行う。

1. 出土遺跡の概要（第1図）

比爪館遺跡は、岩手県中部の紫波郡紫波町南日詰字箱清水に所在し、北上川西岸の河岸段丘（花巻段丘相当面）上に立地する。遺跡範囲は東西約320m、南北約340mで、現況は宅地及び畠地である。紫波町教育委員会が主体となって令和3年度までに34次にわたる調査が実施されており、繩文時代から中世にかけての遺構・遺物が検出されている。ただし、主体となる時代は大きく2時期であり、一つは竪穴建物を主体とする9～10世紀代の集落で、時期不明を含むが70軒近い竪穴建物が検出され、施釉陶器（綠釉・灰釉）・石帶（巡方）・文字関連資料（墨書き土器・硯）といった律令系の遺物が出土している。もう一つは大溝で区画され、内部に掘立柱建物・井戸を有する12世紀代の居館で、鎌倉時代の歴史書『吾妻鏡』に記載されている「比爪館（ひづめのたち）」に比定されると考えられている。居館は東西約300m、南北約200mの範囲で、北・東・西辺は大溝で区画され南辺は五郎沼に面している。発掘調査が実施された地点は遺跡範囲北西側の赤石小学校敷地内に集中しており、発掘調査で全域の様相が判明しているわけではないが、規模の大きな四面庇柱建物をはじめとする掘立柱建物が20棟以上、その他にも塀・井戸等の遺構が検出され、遺構内からはかわらけや国産陶器（渥美窯・常滑窯産）が多く出土している。また、微地形測量調査により南西部に約100m四方の規模を持つ池とその西端に島状の高まりが確認されており、平泉町無量光院跡のような阿弥陀堂淨土庭園が存在していた可能性が指摘されている（岩手県立博物館2016）。居館の成立年代については資料が乏しい為判然としないが、羽柴直人は先述の阿弥陀堂淨土庭園が存在することから、平泉において同様の型式の庭



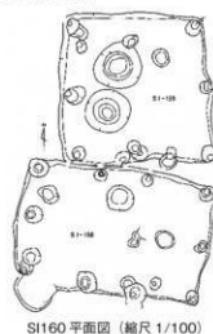
岩手県全図（縮尺不定）



遺跡位置図（1:50,000 日誌を改変）



第12・16・18次調査区
遺構配置図（縮尺=1/600）



S160 平面図（縮尺 1/100）



比爪館遺跡全体図（縮尺 1/4,000）



馬具出土状況（縮尺不定）

第1図 比爪館遺跡の位置・出土遺構

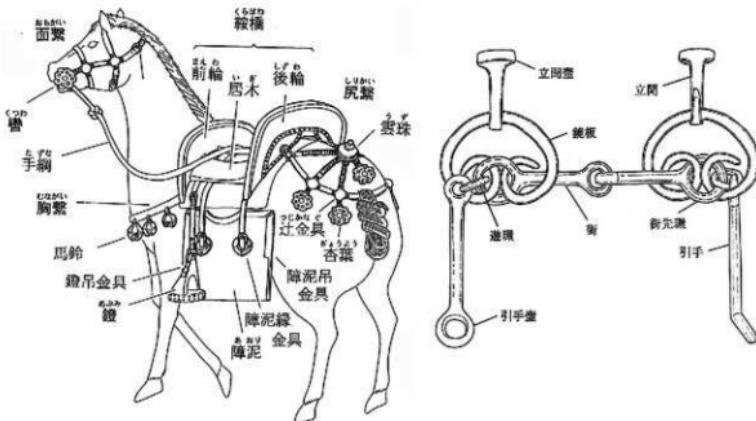
團を有する無量光院跡の造園年代を考慮して嘉応2(1170)年以降の造営と考えている(羽柴2022)。

鉄製馬具が出土した遺構は、遺跡範囲北西側に位置する第12次調査で検出し、第16次調査で精査を行ったSI-160堅穴建物である。平面形は東西に長い長方形で、上面規模は4.7×3.1mである。上面が大幅に削平されており、検出面からの深さは8~10cmである。南北コーナー部に半円状の張出しを有するが、炉や貯蔵穴といった床面施設は検出されていない。出土遺物は馬具以外にかわらけの小片のみであり詳細な年代は不明であるが、庇付掘立柱建物の柱穴に床面を壊されている。報告書中に馬具の出土状況についての記載は無いが、出土状況の写真から堆積土観察用のベルト中の床面よりやや上位で出土したことがわかる(第1図右下)。

2. 資料の観察

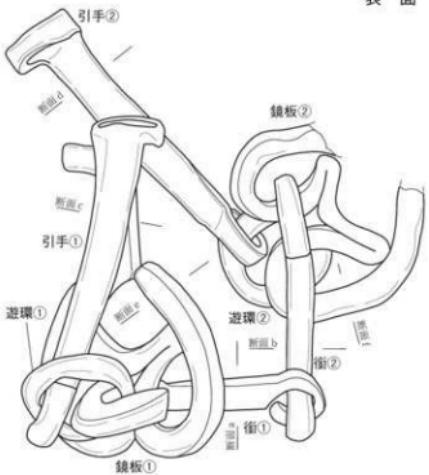
器種は轡で、銜・引手・鏡板・遊環で構成されている。鏡板の一部が欠損しているが、遺存状況は良好である。馬具は複数の部材の組み合わせからなり、機能面から大きく3つの部分に分けられるが、このうち轡は口に取り付けて手綱を繋いで馬を制御する為の道具である(第2図、註1)。前述の通り、本資料は既に保存処理作業が終了しており出土直後の状態ではないが、先述の岩手県立平泉世界文化遺産ガイダンスセンター開館記念企画展の際にX線透過写真撮影(以下、X線写真)が実施されている。撮影者である羽柴直人氏から画像提供をして頂いたことから、実測図作成の参考資料及び一部については掲載資料として使用した。以下では各部の形状や大きさについて記載するが、実測図はX線写真で得られた情報を加味して復元的に作成しており、合わせて掲載した外観写真とは異なる部分があることを先に断っておきたい(第3図、註2)。

銜は馬の口の中に入れて噛ませる道具である。本資料は鉄棒の両端を歯手状に曲げた歯手状銜で、同一形状のものを連結させる二連銜である。銜①は直線的な形状で、銜先環までの長さ10.4cm、棒状部中央部付近は幅・厚さ共に1.15cmで、断面形は正方形である。銜②は鏡板②に連結する銜先環が若干屈曲しているがほぼ直線的であり、端部までの長さ10.8cm、棒状部中央部付近は幅・厚さ共に1.0cmで、断面形は正方形である。銜①・②とも銜先環のほうが銜同士を連結する側(輪達)より大きいが、両側とも先端部に向かって幅・厚さ共に薄くなり、断面形も扁平となる。

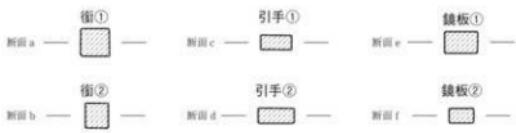
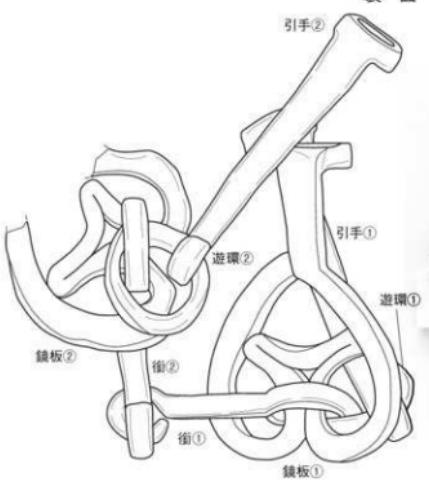


第2図 馬具・轡部分名称図

表面



裏面



(縮尺 = 実測図 1/2、写真不定)

第2図 馬具実測図及び外観写真

引手は柄の先に取り付けられて手綱を連結する為の道具で、引手①・②とも握り無し一本柄引手である。引手①は屈曲の為若干丸みを持つが棒状部はほぼ直線的で、引手壺から反対側の環までの長さは14.0cmである。棒状部は引手壺に向かって幅広の平面形で、引手壺に近い部分は幅1.2cm、厚さ0.6cm、断面形は長方形である。しかし、反対の環に近い部分は幅が狭くなり、断面形は正方形に近くなる。引手壺は棒状部から直角に屈曲し、円形で内径は2.1cmである。引手壺と反対側の環は蕨手状であるが、柄と異なり引手壺に直交し、さらに引手壺の反対側に曲げられている。引手②は歪みが無く直線的な棒状部で、引手壺から反対側の環までの長さは13.3cmである。棒状部形状は引手①と同じであり、引手壺側の幅1.5cm、厚さ0.6cm、断面形は長方形であるが、反対側の環付近は断面形が正方形に近くなる。引手壺と反対側の環の形状も引手①と同じである。

鏡板は、街の脱落を防ぎ面盤に連結する為の道具である。立聞と鏡で構成され、鏡板②は立聞が欠損しているが鏡板①は完形である。鏡板①は鏡の平面形が逆ハート形になるいわゆる「杏葉轡」と呼ばれる形態である。最初に外観観察を行った時点では、通有の杏葉轡と同じく二股に分かれた下端部が蕨手状に巻き上げられる型式で、蕨手状の部分が保存処理の際に本体部と一体化したものと考えていた（第3回外観写真参照）。しかし、実測の際にX線写真で鏡板の部分を観察したところ、蕨手状部分と本体部は離れており、1本の鉄棒を曲げることで立聞から鏡まで一連で作られていたことがわかった（第4図）。立聞と鏡を合わせた長さは13.0cm、最大幅は7.5cmである。統いて立聞と鏡の構造についてみていく。立聞は立聞壺が付き、棒状部分に対して直角に折れ曲がるL字形屈曲立聞である。立聞壺から下端部（鏡との屈曲部）までの長さは約5.0cm、中央部付近の幅1.5cm、厚さ0.9cmで、断面形は長方形である。立聞壺は若干変形しているが、梢円形と考えられ内径は2cm程度である。次に鏡であるが、先述の通り平面形は逆ハート形である。成形方法は、まず直線的に延びた立聞の下端部から外側に屈曲して中央へ下端付近が膨らむように曲げ、下端部の中央から内側に向かって三叉状（あるいは「Y」字状）に曲げていく。三叉状の部分の下端から反対側と対称形になるように曲げていき、立聞の下端部に合わせて留めている。なお、立聞と鏡の端部が接合されていたかは外観からは判別しがたいが、X線写真ではその部分は薄く透過して見えることからわずかに空隙があったものと考えられる（第4図）。鏡板②は立聞を欠損しているが、X線写真の観察では鏡板①と同様の構造・大きさであったと考えられる。なお、鏡を成形する部分の鉄棒は立聞よりも細身であり、外周部分は幅1.0cm、厚さ0.65cm、三叉状の部分は幅0.7cm、厚さ0.6cmである。共に断面形は長方形であるが、三叉状の部分は保存処理の影響もあり現状は若干円形に近い。



(縮尺=模式図1/2、写真不定)

第4図 鏡板①X線透過撮影写真・推定模式図

遊環(遊金)は、銜と引手を連結する為の道具である。遊環①・②とも平面形は円形で、外径は4.0~4.5cm、内径は2.5~3.0cmである。保存処理時の薬品含浸の影響による膨れが大きく、断面及び断面の幅・厚さは計測できなかった。

最後に各部品の連結方法についてみていく(第6図9)。まず銜と鏡板であるが、銜先環が鏡板の三叉状の部分と連結され、さらに鏡板の外側の銜先環に遊環が連結される。次に引手であるが、銜や鏡板ではなく遊環とのみ連結されている。つまり、銜・鏡板と引手を遊環を介して繋ぐいわゆる橋金具連結法であったと考えられる(津野2012)。

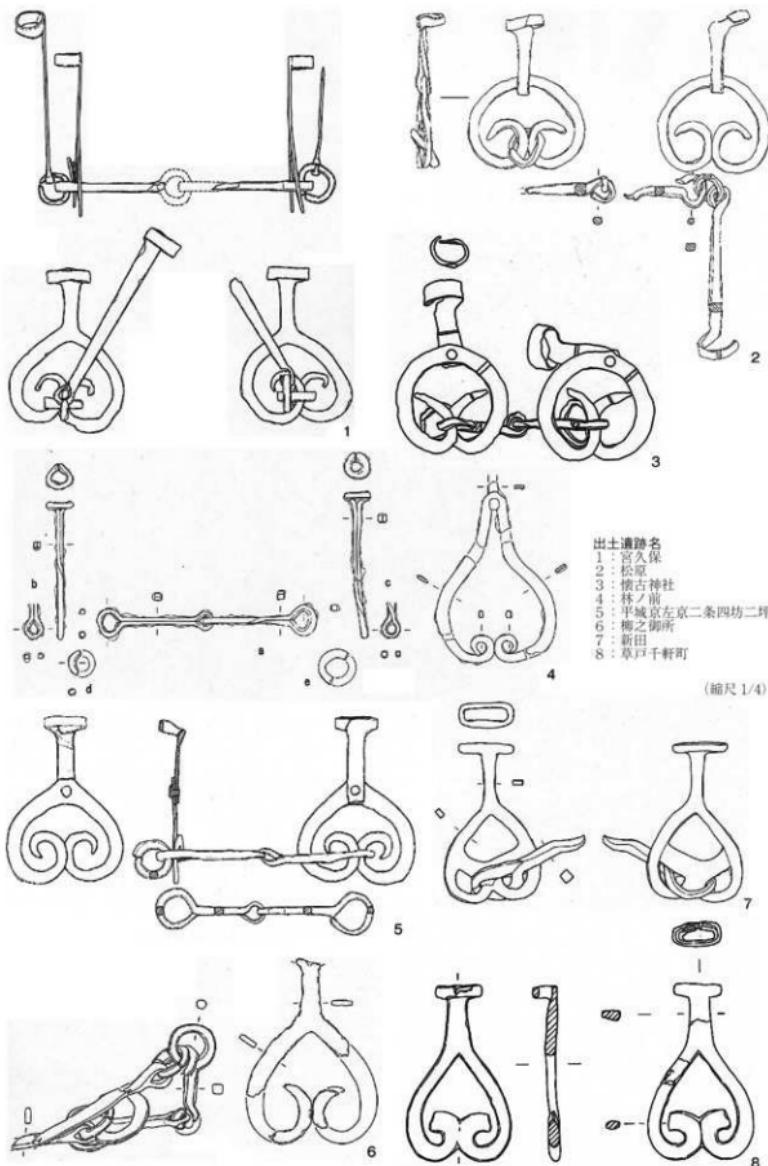
3. 類例との比較(第3図)

前節で記載した通り、本資料は鏡板が逆ハート形の杏葉轡であることが判明した。杏葉轡とは、馬の胸懸り尻懸に着ける杏葉の形に類似した鏡板を持つ轡を指し、平安時代になって出現する型式である。「伴大納言絵巻」(12世紀後半作か)や「平治物語絵巻」(13世紀後半作)、「後三年合戦絵巻」(14世紀中頃作)等の絵巻物に描かれていることが知られているが、伝世品として現存する平安時代の作例は無い(片山1990)。ただし、発掘調査では日本各地の遺跡で出土事例が確認されており、集成や編年についての検討が行われている(鈴木1999・滝瀬1994・津野2012等)。本節では、発掘出土資料から分類を行った鈴木一有の論考を中心として杏葉轡の分類と年代観についてみていき、本資料との比較を行っていきたい。

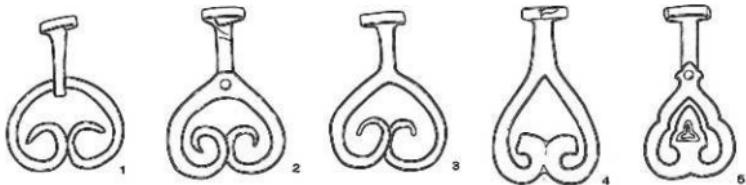
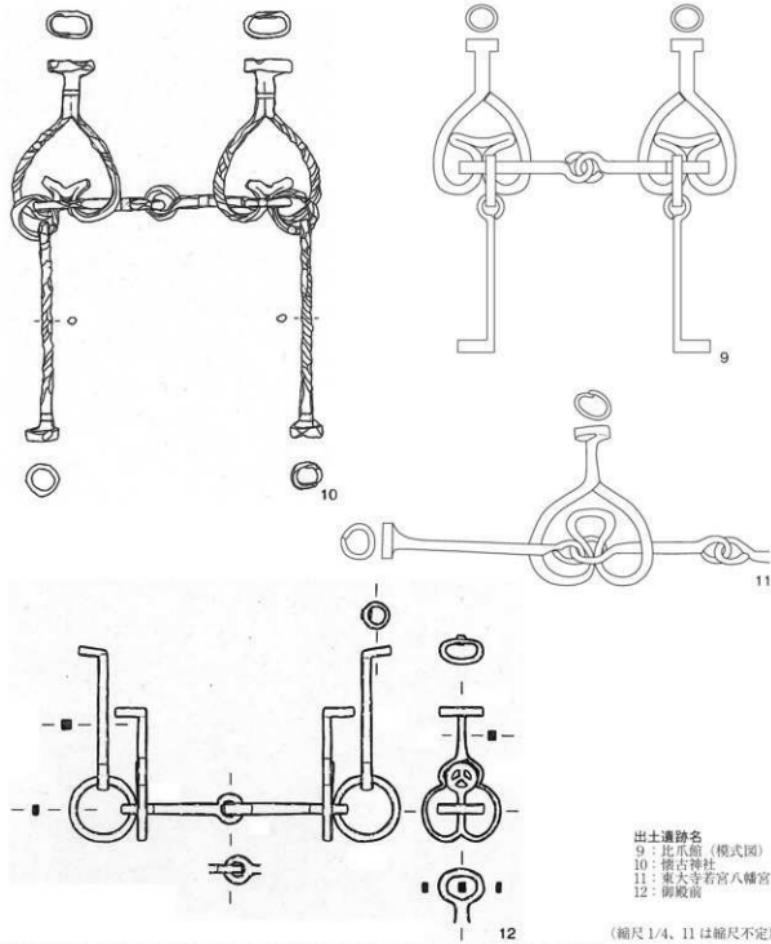
鈴木一有と津野仁の集成によると、杏葉轡は熊本県から青森県まで出土が確認されているが、点数は15点程度であり、轡全体の出土数からみると非常に少ない(鈴木1999・津野2012)。形状がわかる代表的な事例としては第5・6図に挙げたものがあるが、環状・棒状の鉄製品として報告されている破片資料のなかにも含まれている可能性はある。鈴木は片山寛明の系統分類をもとに2類に分類し(第6図下)、鏡板の下端部を麻手状に巻き上げるものとA類、幅が広く扁平な板状で三葉形等の装飾が施されたものをB類とした。また、A類をさらに細分しており、鏡板が円環状で両端が麻手状に巻き込まれるものとA1類、鏡板が逆ハート形となるものをA2類とした。なお、発掘出土品としてはA類がほとんどであり、B類は現在のところ東京都御殿前遺跡例(第6図12、以下第〇図省略)のみである。A類の鏡の形態は、A1類からA2類へという変遷が考えられており、古いものは立聞と鏡が別作りであるが、新しくなると一連作り出されるようになる(第6図下)。すなわち、円環形で別作りのものから逆ハート形で一連の作りのものへという流れが杏葉轡における変化の方向性であったと考えられる。

年代については出土数が少ないと判断できない部分も多いが、遺構内で共伴する遺物や炭化物年代測定結果からA1類に該当する長野県松原遺跡例(2)は9世紀前半、A2類で別作りの奈良県平城京左京二条四坊二坪例(5)は12世紀後葉、A2類で一連の作りである岩手県柳之御所遺跡出土例(6)は12世紀第4四半期と考えられる。この他、御殿前遺跡例(12)や伝世品である長野県懐古神社所蔵品(10)は鎌倉時代(13世紀代)と考えられている。なお、鈴木一有は鏡の形態が円環形から逆ハート形に変化するのは、立聞と鏡の製作方法の変化に加えてB類の成立と関係が深いと推定している(鈴木1999)。

統いて部品ごとに本資料と類例との比較を行っていく。まず銜であるが、残存しているものをみると青森県林ノ前遺跡例(4)を除いて麻手状銜であり、連結数は二連である(註3)。林ノ前遺跡例は二連銜ではあるが二条線引手と同じ製作方法の銜であり、特殊な事例と考えられる。これを除けば本資料を含めていずれも麻手状銜を二つ連結しており、杏葉轡ではこの方法が一般的であったと考え



第5図 同型式器の諸例（1）



1:A1類(松原)、2:A2類(吉野宮)、3:A2類(宮久保)、4:A2類(新規)、5:B類(高津古文化会館蔵品)

第6図 同型式壺の諸例(2)、杏葉壺分類図

られる。次に引手であるが、残存しているものをみると本資料及び神奈川県宮久保遺跡例（1）・松原遺跡例（2）・柳之御所遺跡例（6）・御殿前遺跡例（12）は捩じり無し一本柄引手であるが、長野県懐古神社所蔵品（10）は捩じり有り一本柄引手、林ノ前遺跡例（4）は捩じり無し二条線引手である。なお、現存資料ではないが『集古十種』に掲載されている「大和國東大寺若宮八幡宮藏鞍並皆具図」の杏葉轡（11）も捩じり無し一本柄引手である（註4）。引手壺はいずれもL字形に屈曲し、反対側の環は林ノ前遺跡例を除いて蘇手状である。以上のように、銜に比べてバリエーションは多いが、捩じり無し一本柄引手で、引手壺がL字形に屈曲し蘇手状環を持つものが一般的であったと考えられる。なお、棒状部の断面形は、捩じり無し一本柄引手は正方形又は長方形（2・9・12）と板状（1・6）、捩じり有り一本柄引手は円形（10）、二条線引手は正方形（3）である。

次に鏡板であるが、本資料は鏡の平面形が逆ハート形で立聞と鏡が一連で作り出されていることから鈴木分類のA 2類に該当する。平面形は縱に長い逆ハート形であるが、立聞と鏡の境界の屈曲が明瞭であり、A 2類古相とされる宮久保遺跡例（1）と新相とされる広島県草戸千軒町遺跡出土例（8）との中间的な形態と捉えられる。鏡板の下部は蘇手状に巻き込まれるのではなく、鉄棒を曲げて三叉状に成形しており、このような立聞と鏡が一本の鉄棒からなり鏡の中央部を棒を曲げることで成形するA 2類は、発掘出土品では本資料の他に御殿前遺跡例（12）、伝世品では懐古神社所蔵品（10）や東大寺若宮八幡宮所蔵品（11）がある。また、X線写真が無い為推定にはなるが、鏡の平面形が本資料と類似する宮城県新田遺跡例（7）もこのタイプの可能性がある。なお、中央部の形状は三叉状（9）・「M」字状（10）・「Ω」字状（11）があり、鉄棒の端部が立聞の下端部に接するもの（9・11）と立聞と一体化するもの（10）がある。本資料の断面形は正方形に近いが、懐古神社所蔵品（10）は捩じり有りの円形、東大寺若宮八幡宮所蔵品（11）は同一資料と考えられる奈良県手向山神社所蔵品（日本馬具大鑑編集委員会1991、註4）をみると薄い板状であったと考えられる。なお、立聞はいずれもL字形屈曲立聞で、立聞壺の形状は本資料の他に宮久保遺跡例（1）・松原遺跡例（2）・懐古神社所蔵品（3）・平城京左京二条四坊二坪例（5）・東大寺若宮八幡宮所蔵品（11）が円形、新田遺跡例（7）・草戸千軒町遺跡例（8）・懐古神社所蔵品（10）・御殿前遺跡例（12）が方形である。円形はA 1・2類共にみられるが、方形はA 2類のみであり新しい様相と考えられる。

連結方法についてみると、遊環を介して銜・引手・鏡板を連結する橋金具連結法が多く、本資料もそれに該当する。銜と鏡板が連結され、さらに鏡板の外側の銜先環に連結された遊環に引手が連結されるものが多いが、松原遺跡例（2）は鏡板の蘇手状部分に遊環が連結されている。東大寺若宮八幡宮所蔵品（11）は遊環が無く銜と引手が直接連結される引手・銜共連法であるが、京都府高津古文化会館や東京国立博物館に所蔵されているB類の伝世品をみても橋金具連結法がほとんどであることから（日本馬具大鑑編集委員会1991）、杏葉轡ではこの方法が一般的であったと考えられる。

ここまで本資料及び類例について特徴をみてきた。最後に鏡板①を中心と本資料の年代的位置づけについてみていく。本資料のような形態・成形方法のものは、鎌倉時代の製品とされる伝世品に多い（10・11）。また、発掘出土品では13世紀代と考えられる新田遺跡例（7）と類似しており、本資料も13世紀代に属する可能性がある（註5）。ただし、鏡の平面形が12世紀後葉と考えられる平城京左京二条四坊二坪例（5）と中世と考えられる草戸千軒町遺跡例（8）の中間的な様相であり、13世紀以降の製品に多い方形の立聞壺ではないこと等を考慮すると、本資料は12世紀後葉～13世紀前葉頃に製作されたものと考えられる。本資料はSI-160の床面よりやや高い位置で出土しており、明確にこの堅穴建物に伴うと断定はできないが（第1図）、小片ではあるがかわらけも共伴していることから、「北爪館」が成立した時期に製作・使用された可能性もある。

おわりに

以上、観察結果に不十分な部分もあると思われるが比爪館遺跡出土馬具について検討を加えてきた。本稿の成果としては、①実測図の作成により一部の欠損を除き遺存状況が良好であり、全国的にも少ない杏葉轡の類例を追加することができた、②類例との比較を通じて古代末～中世初頭にかけて製作されたものであることを示すことができた、という2点を挙げておきたい。

最後に、本稿の作成にあたり実測図及び写真の掲載を許可して頂いた紫波町教育委員会と実見の機会を与えて頂いた岩館氏・羽柴直人氏に記して感謝の意を申し上げます。

註

1. 曽の分類及び各部名称については鈴木1999と津野2012に従って記載した。
2. 本資料は既に保存処理作業が行われた状態であり、各部の計測値は肉眼観察により明確に錯や薬品による影響と判断できる部分を除いた数値である。その為、出土直後の状態とは数値が異なる可能性はあるが、参考値として挙げておく。
3. 宮久保遺跡例は輸送の部分が運送で連結されていたと想定されているが（第5図1）、他の事例を見る限り二連街とみなすのが妥当と考えられる。
4. 東大寺守宮八幡宮は現在の奈良県立手向山八幡宮のことを指すと考えられ、「集古十種」掲載の杏葉轡は「日本馬具大鑑 第二巻」に掲載されている奈良手向山神社蔵の杏葉轡（図版577）と同一資料の可能性がある。
5. 新田道路例は中世陶器と共に伴することから13世紀代と考えられている。実測図・写真が無い為詳細は不明であるが、新田遺跡を含む多賀城周辺の遺跡では12世紀代の国産陶器も一定量出土することからこちらに属する可能性もある。

参考文献

- 青森県教育委員会 2006 「林ノ前遺跡Ⅱ 遺物・自然科学分析編」青森県埋蔵文化財調査報告書第415集
岩手県立博物館 2014 「比爪 ～もう一つの平泉～」岩手県立博物館テーマ展図録
2016 「前平泉文化関連遺跡調査報告書」岩手県立博物館調査研究報告書第33冊
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1995 「柳之御所跡」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第228集
風間春芳 1999 「長野県内の杏葉轡3例について」『長野県考古学会誌』第90号
片山寛明 1990 「和式轡の展開」『日本馬具大鑑 第三巻 中世』日本中央競馬会
神奈川県立埋蔵文化財センター 1990 「宮久保遺跡Ⅲ 本文編」神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告15
国書刊行会 1908 「集古十種 卷四」
紫波町教育委員会 2002 「比爪館 第11～18次発掘調査報告書」
2015 「比爪館 第31次・第32次発掘調査報告書」紫波町埋蔵文化財調査報告書2014
坂本美夫 1985 「馬具」ニュー・サイエンス社
鈴木一有 1999 「律令時代の轡の系譜」『下流遺跡群2』財团法人浜松市文化財協会
多賀城市埋蔵文化財調査センター 1989 「新田遺跡」多賀城市文化財調査報告書第18集
瀧瀬芳之 1994 「轡について」『光山遺跡群』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第137集
津野 仁 2003 「奈良時代武器・武具生産への変化」『武器生産と流通の諸画期』七世紀研究会シンポジウム資料
2012 「古代轡の変遷とその意義」『考古学雑誌』第96巻第3号 日本考古学会
東海古墳文化研究会 2006 「東海の馬具と鉄大刀」
東京都北区教育委員会 1992 「御殿前遺跡」
長野県教育委員会 2000 「上信越自動車道沿線埋蔵文化財調査報告書6 -長野市内その4- 松原遺跡 古代・中世 国版編」
長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書53
奈良市教育委員会 1989 「平城京左京二条四坊二坪の調査」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 昭和63年度』
日本馬具大鑑編集委員会 1991 「日本馬具大鑑 第二巻 古代」
羽柴直人 2022 「もう一つの平泉 奥州藤原氏第二の都市・比爪」吉川弘文館
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1994 「草戸千軒町遺跡発掘調査報告 II 北部地域南半部の調査」
村田 淳 2021 「岩手県出土の古代馬具集成」『紀要』第40号 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

図版出典

- 第1図 岩手県立博物館2014・紫波町教委2002から転載及び筆者作成
第2図 鈴木1999・東海古墳文化研究会2006から転載 第3図 筆者作成・撮影 第4図 羽柴直人氏撮影、筆者作成
第5図 青森県教委2006・岩手県理文1995・風間1999・神奈川県理文1990・多賀城市理文1989・長野県教委2000
・奈良市教委1990・広島県草戸千軒町遺跡調査研究所1994から転載
第6図 風間1999・東京都北区教委1992から転載及び国書刊行会1908から再トレース、筆者作成

執筆者（論稿掲載順）

金子 昭彦（かねこ あきひこ）

（公財）岩手県文化振興事業団博物館

福島 正和（ふくしま まさかず）

（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

村木 敬（むらき たかし）

（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

村田 淳（むらた じゅん）

（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

紀要 第42号

印 刷 令和5年3月15日

発 行 令和5年3月24日

発行 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地

電話 (019) 638-9001

FAX (019) 638-8563

印刷 小松総合印刷株式会社

〒020-0827 岩手県盛岡市鉢屋町15-4

電話 (019) 624-1374

BULLETIN OF THE
RESEARCH INSTITUTE
FOR CULTURAL ARTIFACTS
VOL. 42

CONTENTS

Articles

Clay Figurine in the Tohoku Region of the Final Jomon Period(8)

– new reported material after (6) of this paper except collection at (7) and omitted material till (6) –

KANEKO,Akihiko

Structures and Functions of the Residence which was found in Takusarikurumadoumae-site in miyako-city.

FUKUSHIMA,Masakazu

Notes

Production of Ground Stone Axes in Iwate Prefectur

MURAKI,Takash

A Study of Iron Harness Excavated at Hizumede Site in Shiwa Town

MURATAJun